

当館所蔵の「絵入り本」解題③

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四五号に掲載した拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」に続くものである。

本稿も前回同様、『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査し、目録題の順序に拠って解題を掲載する。

なお「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵を伴うものすべてを対象とした。

【七七】鎌倉繁栄広記 延享二年 一二冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇四・〇一〇四」
『鎌倉繁栄広記』は、享保三年に出版された『武徳鎌倉旧記』の続編として延享二年に出版された。本書はその延享二年版に相当する。

作者は八文字屋自笑とされ、いわゆる八文字屋本と称される浮世草子のひとつである。ただし、序文には延享二年付の自笑の署があるが、この年に自笑は死去しており、実際に本作が自笑の自作であるかは判然としない。

江島其積と利権を巡ってトラブルがあったことでもわかるとおり、事実、自笑は、実際の作者と版元である自分の名前を連名で出版、あるいは自身の名義で出版するなどの場合も多くあったため、一概にすべて自笑の自作であるということとはできない。さらに本書の前編にあたる『武徳鎌倉旧記』の作者である馬場信意はこのときすでに没しており、続編の構想が彼の本意であったかどうかも疑わしいところがある。

本書は、源実朝が將軍職に就くところから、彼が甥の公暁に暗殺され、撰家將軍九条頼経が鎌倉に迎えられるまでを舞台に描く。『吾妻鏡』や『源平盛衰記』『北条九代記』など、先行する史料や軍記に題材をとり、脚色を加えた上で、新しい軍記物として編集した。

おそらく自筆版下と考えられる八文字自笑の序文は次の通りである。
「天文を見て時変を察し人文を／見て天下を化成するとは賢君の政／なるそや往昔源乃頼朝四海の逆浪を／静め武家の棟梁として天下を掌握／有しも是偏に天運のなせる事也されど／纔三代にして北条の權威に奪れぬる／争乱の基歴代の軍書にもれたる事共を／拾い纂め全部十二巻に編て／鎌倉繁栄広記と号世に弘め畢／延享二乙丑／青陽上旬／作者／八文字自笑（印）」

これを踏まえてか、第一冊目の裏見返しには、「□武徳鎌倉旧記十二冊／拾四冊之内／後編鎌倉繁栄広記」と墨書された貼り紙がある（一部欠損）。

ここには「大林」(楕円型墨印一・六糎×一・二糎)という印が押されているところからみて、貸本屋の手によるものと想像される。

挿絵は各巻の冒頭に必ず見開きで添えられる。登場人物の服装や、見得をきる仕草などに、歌舞伎の影響を見ることができ。ただし、本書の場合、磨減が甚だしく、不鮮明な挿絵も少なくない。

なお本書の旧蔵者は不明。「東洞八清」(正方陰刻墨印三・〇糎×三・〇糎)という押印が各冊巻頭にある。

【書誌】

外題・「新板／絵入／鎌倉繁栄広記 壺之巻(十二之巻)」左肩四周双辺刷題簽(一七・二糎×三・六糎)

内題・「鎌倉繁栄広記」

表紙・改装縹色表紙(二五・〇糎×一八・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①一六丁(三図)、②一八丁(四図)、③一五丁(四図)、④一五丁(四図)、⑤一五丁(四図)、⑥一六丁(四図)、⑦一六丁(五図)、⑧一六丁(五図)、⑨一七丁(五図)、⑩一七丁(五図)、⑪一七丁(五図)、⑫一四丁(五図)

匡郭・四周単辺(二〇・二糎×一六・〇糎)

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「大林」(楕円型墨印一・六糎×一・二糎)「東洞八清」(正方陰刻墨印三・〇糎×三・〇糎)「御本所／東華軒／平野屋宗七」(長方墨印四・五糎×三・二糎)

備考・①④⑤⑥⑫元題簽欠。無材料紙題簽に墨書「新板／絵入／鎌倉繁栄広記」。

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り。(⑫一四才)

「延享二年／丑正月吉日／京ふや町通せいくわんじ下ル町／八文字屋八左

衛門板」

八文字屋は、鶴屋喜右衛門・山本九兵衛と並び、京の三大正本屋である。本書の作者とされる自笑は二代目に当たり、浮世草子の分野を確立、市場を西鶴と二分した。もとは六角通大黒町に店を構えていたが、この頃は麩屋町通誓願寺六角通下ルに店があった。本書が出版された延享二年に自笑は没したため、出版そのものは子の瑞笑の手によるもの可能性が高い。

ただし、本書には「御本所／東華軒／平野屋宗七」の判がある。平野屋宗七には、大坂南紺屋町の書肆と、京四条芝居側の書肆の二つがあり、いずれも屋号が不明のため、どちらを指すか判然としない。八文字屋の活動時期に近いのは、京の平野屋のほうで、その場合、本書は後刷で、平野屋が求版して出版したものと考えることもできる。

【七八】諸道聴耳世間猿 明和三年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇四・〇一三四」

『諸道聴耳世間猿』は上田秋成(このときの戯名は和訳太郎)の手による最初の小説作品。五巻五冊。一巻につき三話ずつ、計一五話の当世風俗を描いた短編で構成されている。

このころの秋成は漁焉の号で、大坂俳壇で活躍していた。与謝蕪村らと親しく交わっており、本書を含む浮世草子二作を発表したのは、当時の文学好きの俳諧者の遊びの一環に過ぎなかったという。しかし、すでに秋成は深い教養を身につけており、本書には古今東西の多くの文学作品が典拠として引用されている。

なお、本書の序文(自筆版下)では、秋成は次のように記している。

「彼賢人の中間法度に偽めきし／真はかたるとも真候へさき虚言は／つかぬことの候や釈迦の蔵経莊子に南華経うそのまことの真のうそで／おもはくは我こ、給はり出て人の口／にはかり遊き貂となり鼬となる其尾／に喰つく世の噂を天に口なし婆嬪／のそしりはし梨に候をいは猿のいまし／めをまこと、なばこけ狙の指ざしに／あふさらば尻わらひの戯れ草を／朝三暮四に筆まめに書聚めて／題号を聴耳世間狙とよぶ事は／見猿の人の伽ともならんかし／明和三年／いぬのとし／浪々斎／和訳太郎（印）」

ただし、本書の出版願いはすでに明和元年に出されているので、作品そのものは明和元年には完成していたと思われる。序文は出版に際して改めて書かれたものであろう。

挿絵は各冊四図ずつ、すべて見開きである。絵師は桂宗信。作者の上田秋成とは親交が深く、その他の秋成の作品の挿絵も手掛けている。

本書の挿絵には、多くの見立てが用いられて様々な意味が込められているという指摘がある。例えば、勤めを辞めない若作りの芸子の挿絵は、「卒塔婆小町」と「娘道成寺」を暗示しているというものである。このように、本文の解釈に大きな影響を及ぼす挿絵は、作者と絵師の連携がなければ成り立たず、こうした点においても、それまでの絵入版本とは、挿絵の意味が大きく異なる時期の作品であるといえる。

なお、本書は、昌平坂学問所記録調所の旧蔵。文久三年に新収されたもの。

【書誌】

外題・「新板／絵入／諸道聴耳世間狙 一之巻（～五之巻）」左肩四周双
辺刷題簽（一七・三糎×三・五糎）

内題・「諸道聴耳世間猿」

表紙・改装萌黄色表紙（二三・〇糎×一六・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一九丁（四図）、②一七丁（四図）、③

一八丁（四図）、④一七丁（四図）、⑤二〇丁（四図）

匡郭・四周单边（二〇・五糎×一四・五糎）

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」「昌平坂」「番外書冊」「文久癸亥」「漫筆雑考」（表紙に紙片で貼付）

備考・①②表紙縹色料紙で修理。⑤遊び紙一丁あり。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は次の通りである。（⑤二〇才）

「明和三戌正月吉日／世間菱形氣 全五冊／諸国廻船便 全五冊／右近
日板行出来仕候間御求御覽可被下候／書林／大坂心斎橋筋しほ町／正本屋
清兵衛板」

刊年は明和三年。諸本のなかには明和元年の刊記を持つもの（大坂山田屋嘉右衛門版）もあるが、実際には明和三年が初版である。本書はその後刷で、新たに一丁を追加して刊記を差し替えたもの。そのときに、広告も挿入した。版元の正本屋清兵衛は大坂の書肆で、心斎橋筋塩町に店を構えていた。本清とも称される。本姓は玉置氏。宝暦一四年に本屋仲間に加わり、明治まで活動していた。

なお、後刷では本書の他に天保一〇年版、嘉永二年版などがある。

【七九】隅田河鏡池伝 寛延四年刊 五冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇四・〇一一〇」

本書は本母寺に伝わる梅若伝説を基にしたもので、寛延四年に刊行された。作者は西向庵春帳。挿絵は遊川春信。五卷五冊。漢字片仮名交じりの本文を持つ。いわゆる勸化本である。

梅若伝説とは、隅田川を舞台とした木母寺の縁起譚である。ある少将の子である梅若丸が比叡山で修行するも疎まれて下山したところ、人買いにかどわかされて東国へと連れ去られ、拳句、病に罹り隅田川の岸辺で没する。里人がこれを憐れに思い塚を建てて供養していたところ、半狂乱となった梅若の母が消息の絶えた息子を探してやってくる。この母は息子の塚をみつげ手厚く供養したあと入水し、二人はその後里人によって弔われてこれが木母寺の由来となった。

梅若縁起は中世以来語られてきたものであると考えられるが、特に観世元雅の手により謡曲『隅田川』となつてから、人口に膾炙されるようになった。やがて歌舞伎などの芝居にも取り上げられるようになり、読本としても親しまれるようになった。本書はそうした背景の中で成立したものである。内容は従来の梅若縁起に加筆しているがおおよそ同じ。のちに曲亭馬琴の著作『隅田川梅柳新書』にも影響を与えている。作者の西向庵春帳は、近世中期の江戸の戯作者で、本書の他に『苜蓿道心行状記』『復讐奇談』などの著作があるが、その来歴は定かではない。およそ縁起・説経を基とした著述が多いことから唱導家であることが想像される。本書が出版された頃にはすでに故人であつたらしい。

挿絵の絵師は遊川春信。ただし、本書以外に作品を見ることはできず、やはり来歴は不明である。ただし、本書の挿絵には「直泰法橋遊川春信七十六歳画」と入れられており、寛延四年の段階で七十六歳だったとすると、生年は延宝三年であると推定される。本書の挿絵は、物語の場面を描いたものではなく、扉に、梅若丸とその母の肖像を描いたもの。本書が娯楽的な要素より、唱導を重視した作品であることの表れである。絵にはそれぞれ上部に横書きで「梅若丸肖像」「妙亀尼道影」とある。

本書の舞台となつている木母寺は、本書が出版された当時、將軍休息所

として隅田川御殿と称されて隆盛をほこっていた。慶長一〇年に近衛信尹により木母寺の名前を与えられて以来、文人墨客のサロンとしての機能も担っていた。天明水害によって衰退するが、この頃はまた広大な敷地と禄を賜っていたといわれている。木母寺は現在も『梅若権現御縁起』という絵巻を所蔵しており、本書の基となっている。

なお本書は寛延四年版であるが、諸版に明和三年版と安永一〇年版（『梅若丸一生記』）とがある。

本書は明治一三年に内務省が購入したもの。旧蔵者のものと思われる正
方陽刻印（二・三糎×二・三糎）が各冊巻頭に押印されている。朱書きの書き入れがあり、これも旧蔵者の手によるものと思われる。

【書誌】

外題・「勸化／資補／隅田河鏡池伝／木母寺来由 一（一五）」左肩四周
双辺刷題簽（一九・〇糎×三・八糎）

内題・「隅田河鏡池伝」

表紙・改装縹色表紙（二五・五糎×一七・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一七丁（二函）、②一五丁、③一八丁、④

一一丁、⑤一五丁

匡郭・四周単辺（二〇・〇糎×一五・〇糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」「日本政府図書」不明印記（正
方陽刻印二・三糎）

備考・挿絵は①一オ・一ウの一丁のみ。各冊飛丁あり。③遊紙一丁あり。

【刊年・刊行者】

本書の跋文には寛延二年乙巳三月十五日の奥書があり、成立は寛延二年
で、二年後の寛延四年に出版された。本書の刊記は一九・七糎×四・五糎の
四周単辺の枠内に次のように記されている。

「寛延四辛未歳／書林／大坂心齋橋筋順慶町／洪川清右衛門／京堀川錦上ル町／西村市郎右衛門／江戸本町三丁目／西村源六」

洪川清右衛門は大坂心齋橋筋順慶町北入五丁目に店を構えていた柏原屋清右衛門のこと。享保年間に御伽草子二三篇を出版した版元として知られる。西村市郎衛門は京堀川錦小路上ルに店を構えていた書肆で、初代は未達の名で俳人・浮世草子作家として活躍した。西村源六は、文刻堂とも号した江戸の書肆。天保年間には浅草に店を移している。本書はこれら三都の書肆による三都版である。

【八〇】坂東忠義伝 安永四年刊 一五冊

内務省旧蔵 「請求番号一七一・〇〇二七」

『坂東忠義伝』は、三木成爲作・北尾重政画による読本で、一〇巻一〇冊で安永四年に出版された。改題本に『関東古戦録』がある。ただし、本書に関しては分冊されており、一〇巻一五冊となっている。函架番号との対応は以下の通り。

- ①巻之一上、②巻之一下、③巻之二、④巻之三上、⑤巻之三下、⑥巻四之上、⑦巻之四下、⑧巻之五、⑨巻之六上、⑩巻之六下、⑪巻之七、⑫巻之八、⑬巻之九、⑭巻之十上、⑮巻之十下

元文五年高泰序。表紙見返しに同一の料紙で題・著者・源之齋東隅の付言・版元の記載がある。

内容は悲運の武将足利義連の一代記を中心とするが、様々な武士の活躍や滅亡などを描いたもの。『日本水滸伝』とほぼ同一のあらすじを持つが、本書独自の記事も多い。本書と『日本水滸伝』の関係に関しては諸説あり、

『日本水滸伝』の影響で本書が成立したとする説と、近世の軍談を元に両者が生まれた兄弟関係にあるとする説とがあるが、出版時期の問題も含めいまだ不明な点が多い。

作者の三木成爲についても詳細は不明であるが、その他の著作に『関東忠義伝』『小田統記』などを挙げることができ、伝記・軍談作者であったことが想像される。

絵師の北尾重政は、須原屋三郎兵衛の長子で、独学で絵を学び狩野派風の独自の画風を確立した人物である。勝川春章や歌川豊春らと錦絵を製作して人気を博すが、安永後期には根岸大塚に隠居して絵本の挿絵製作に専念するようになる。本書はちょうどその頃に手がけたものになる。巻頭には「七英傑画讃」を掲げ、作中に登場する七人の武将の肖像画を載せた。本文中の挿絵はすべて見開きである。

なお、本書は明治一二年に内務省が購入したもの。

【書誌】

外題・「坂東忠義伝 卷之一上（巻之十下）」左肩四周単辺刷題簽（二八・〇糶×三・二糶）

内題・「坂東忠義伝」

表紙・改装代楮色表紙（二七・三糶×一七・八糶）

- 墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二〇丁（五図）、②二〇丁（二図）、③二六丁（四図）、④一四丁（二図）、⑤一四丁（二図）、⑥一五丁（二図）、⑦一五丁（二図）、⑧一五丁（四図）、⑨一七丁（二図）、⑩一八丁（二図）、⑪三三丁（四図）、⑫三三丁（四図）、⑬二七丁（四図）、⑭二〇丁（二図）、⑮一四丁（二図）

匡郭・四周単辺（二〇・〇糶×一四・五糶）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治一二年購求」

備考・①三ウ「全部画図北尾重政写」⑥遊紙一丁あり。⑪飛丁あり。全体的に虫入り。

【刊年・刊行者】

序文は元文五年、跋は元禄一三年、初版は安永四年であり、それぞれ差があるため複雑な成立過程が想像される。

本書の刊記は以下の通り。

「安永四年／江戸書林／合梓／須原屋伊八／大坂屋平三郎」（一四ウ）

ここには安永四年とあるが、実際には割印帳の記載によると須原屋と大坂屋による相合版は安永六年の出版である。安永四年版本は存在・所在とも不明。他に安永七年版の後刷本などがある。

須原屋伊八は東叡山御用を務めた書肆で、初代は須原屋茂兵衛に奉公後独立したといわれている。慶元堂、文淵堂などの屋号があるが、本書見返しには青黎閣とある。本書が出版されたころは池之端仲町あるいは浅草茅町二丁目のいずれかであったと思われる。大坂屋平三郎も同じく江戸の書肆である。見返しには宣揚堂として載る。江戸室町三丁目に店を構えていた。

【八一】絵本太閤記 明治一五年刊 六冊

太政官記録局旧蔵「請求番号二〇四・〇一三〇」

『絵本太閤記』は各一二巻一二冊全七編で刊行された上方仕立ての絵本読本である。初編は寛政九年初版。最後の七編は享和二年に出版されて人氣を博した。太閤豊臣秀吉の一代記である。

当文庫に所蔵されている本書は、初編のみで、一二巻六冊に合冊されて

いる。また、初版ではなく、明治一五年に再版されたものである。

『絵本太閤記』は初版当時、上方出版界で爆発的なヒットとなったが、江戸で出版された際に禁令に触れて版木没収、過料の沙汰が下り、ついに文化五年に絶版となった。江戸の本屋の失敗が上方を直撃した形となり、上方出版界衰退の一因となったともいわれている。しかし、安永一〇年に再版願いが許可されており、その後は安定的に出版されたとみられる。明治に入って再刷されたのもその人気ゆえのものといえることができるだろう。

作者は武内確斎。漢詩人としても著名。特に篆刻家としては一家をなしており、狂歌師としても活躍、墓表を頼山陽が揮毫しているなどマルチな文化人として多くの人々と交流していた。読本の作品には、実録体小説を脚色したものが多く、上方書肆の企画から携わるなどした。『絵本太閤記』はその代表作に相当する。『太閤真蹟記』を素材とはしているが、大幅な増補とリメイクで広い評判を得た。

挿絵の絵師は岡田玉山。もとは往来物や俳諧書などに絵を提供していたが、寛政年間後半から絵本読本の挿絵に携わるようになる。唐風の絵が特徴で、肉筆の花鳥風月・人物画にも秀作が多い。彼にとっても本書『絵本太閤記』は代表作で、挿絵はすべて見開き、各一二巻一二冊七編の本書に、ほぼ各ページごとに挿絵を入れているという大作である。薄墨との濃淡を使った二色刷りを用い、また本書では岩倉落城の場面(②二三ウ・二四オ)では城を包む炎が朱色で印刷されている。巻頭(①一二ウ・一四オ)にはそれぞれ織田信長と豊臣秀吉の肖像画を描き、梓、目録なども、千成り瓢箪などの絵で飾る。細密な画風である。本書は版木の磨滅も少なく挿絵の刷りの状態も良好。

なお、武内確斎と岡田玉山はたびたびコンビを組んでおり、『絵本玉藻譚』

や『阿也可之譚』などの作品があり、いずれも当時の上方では人気作となった。

本書の表紙には、瓢箪唐草地に、織田木瓜と五三の桐の紋が空押されている。これは織田信長と豊臣秀吉の家紋を型押しした意匠で、瓢箪唐草は秀吉の馬印千成り瓢箪を意識したものである。見返しには黄色料紙で唐本風の内題が出されており、この匡郭も瓢箪柄である。

なお、本書は太政官記録局の旧蔵書。太政官記録局は公文書管理のために設けられた機関であり、本書に押印されている「太政官記録印」は記録局所用の蔵書印。ただし、この印が用いられたのは明治一八年以前で、本書が明治一五年に出版されたことを考えると、出版まもなく所蔵されたことが想像される。

【書誌】

外題・「頭書／増補／絵本太閤記 初編 一二（〜十二）」左肩四周
双辺刷題簽（一六・二種×二・七種）

内題・「絵本太閤記」

表紙・改装萌黄色瓢箪唐草地木瓜五三桐紋型押文様表紙（二・三種×一五・三種）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①六六丁（四六図）、②五二丁（四六図）、
③四二丁（四〇図）、④四九丁（四二図）、⑤五〇丁（四四図）、⑥四四丁（三八
図）

匡郭・四周双辺（一七・五種×一三・〇種）

印記・「太政官記録印」

【刊年・刊行者】

本書は⑥四三才以降に新しい刊記がつけられている。以下の通りである。

「明治十五年十一月十二日出版御届／同年十二月出版〔定価金壹円八拾銭〕

の朱印あり）／東京麹町区飯田町二丁目五十番地／東京同益出版社（印）
／同区同町三番地／静岡県土族／同社々長／兼出版人／増補者中村頼治
（印）／校正者森田隆策／浄書者矢野西洲／東京売捌所／山城屋佐兵衛／
和泉屋市兵衛／博聞社」

出版元の東京同益出版社は当時飯田町にあった出版社であり、印刷所でもあった。この頃、『絵本通俗三國志』『絵本太平記』など近世後期の絵本読本の再版を多く手がけていた。また活字翻刻本の予約出版がその主な活動であり、明治一五年から一九年頃にかけては多くの美本を世に出している。明治一九年頃には、硯友社の雑誌『我楽多文庫』の出版を請け負っており、硯友社はこの出版社の向かいにあった。

東京売捌所と出ている山城屋佐兵衛と和泉屋市兵衛は、いずれも江戸前期から続く老舗の書肆である。山城屋佐兵衛は日本橋に店を構えて、玉山堂と号した。和泉屋市兵衛は芝神明前に店を構えており、号は甘泉堂。このふたつの書肆は、本書出版と同じ明治一五年に、相合版で堤正勝の『日本蒙求続編』を出版している。

博聞社は、長尾景弼によって創業された出版社で、明治前期に最も盛んに活動した出版社のひとつである。これらの三社が東京で本書の販売を請け負っていた。⑥四三才〜四四ウには全国の書肆が掲載されているが、これらもおそらく売捌店であろう。

【八二】源氏一統志 弘化三年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一七一・〇〇〇五」

『源氏一統志』は一〇巻一〇冊で弘化三年に三都版として出版された。

ただし、当文庫所蔵の本書はその初編にあたる五冊（首巻一冊四巻四冊）のみである。源氏の祖・六孫王経基の臣籍降下から平将門の乱を経て釜嶋合戦に至るまで、源氏の英雄たち一門の歴史を描く。（なお後編にあたる五巻五冊は『頼光朝臣勲功図会』という別の書名が付けられており、刊行時期も別かと思われる）

作者は松亭金水（本名を中村保定）。読本・人情本の作者として活躍した。もとは筆耕を生業としたが、為永春水の浄書を務めるうちに大きな影響を受けて自作するようになる。天保二年に『二十四孝稚教訓』を出版し人情本作者として独立、春水に次ぐ作品数を残した。勸善懲悪を軸とした伝奇ものの傾向が強く、人情本特有の艶っぽい表現が少ないため、天保の改革でも特に咎めを受けることはなかった。本書はその金水が書いた読本であるが、その伝奇的作風を大いに發揮したものである。金水は、途中で中断してしまった他の作者の作品を、版元の要望で書き継いだことも多く、読本作品にはそういったものも多数見られるが、本書は、金水の単独作品である。

挿絵は葛飾北斎（本書では北斎為一老人名義）である。嘉永二年に没した北斎にとっては、本書の挿絵は最晩年の作品に相当する。北斎は文化文政年間から読本挿絵に積極的に取り組んでおり、『北斎漫画』をはじめとして絵本類で一世を風靡した。天保年間に代表作『富嶽三十六景』を発表、浮世絵に本格的な風景画・花鳥風月画の分野を確立するが、絵本類の製作から退くことはなかった。最晩年は歴史画風の題材を好み、本書でも源氏の武者たちをダイナミックに描いてその技量を發揮している。薄墨で数段階の濃淡を表現しており、首巻には、作中に登場する武者たちの肖像が載せられた。各冊に見開きの挿絵が多く添えられている。

首巻にはその他、系図・目録・序文・凡例などが掲載されており、物語

の本文は第二冊目の巻一から始まっている。⑤巻四一才の挿絵が衍丁。見返しに黄色料紙で内題が出してある。「源氏一統志／中村保定編輯／北斎為一画図／発兌書肆 岡田群玉堂／稲田金幸堂／合刻」とあり、上部に龍文様の魁星印。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。本書に押印されている「新刊納本」の墨印は、天保一三年に幕府が定めた検閲制度によるもの。以降、検閲を受けた新刊書はすべてこの墨印が押され、当文庫では慶応四年刊本がその最後になる。

【書誌】

外題・源氏一統志 首巻（一四）左肩四周双辺刷題簽（一六・二種×四・〇種）

内題・源氏一統志

表紙・朱色雷紋繫型押表紙（二二・五種×一五・五種）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一七丁（九図）、②一八丁（六図）、③

二四丁（六図）、④二二丁（六図）、⑤三二丁（七図）

匡郭・四周単辺（一八・〇種×二三・〇種）

印記・「番外書冊」「史伝載紀」「新刊納本」「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

二二才以下の通りある。

「江戸 松亭 中村源八郎保定輯／江戸 北斎 為一老人八右衛門画／浄書 一貫齋金交／劔劔 朝倉伊八刀／弘化三歳宿丙午春二月吉辰発行／京都書林 寺町通仏光寺角／河内屋藤四郎／大坂書林 心齋橋筋博労町／河内屋茂兵衛／江戸書林 馬喰町二丁目／菊屋幸三郎」

京都の河内屋藤四郎は近世後期を中心に活動した書肆で、懐玉堂と号し

た。大坂の河内屋茂兵衛は、心齋橋筋博労町の書肆であるが、これ以前は順慶町に店があったとみられる。近世前期から明治まで長きにわたり活動した。見返しにある「岡田群玉堂」とはこの河内屋茂兵衛のことである。江戸の菊屋幸三郎は近世後期に活動した書肆で、俳書・喃本・人情本に加え版画なども取り扱っていた。化粧葉「清涼香」「清温香」の江戸元祖調合所、江戸売払所としても知られる。見返しにある「稲田金幸堂」は菊屋幸三郎のこと。

なお、筆耕の一貫齋金交と刻工の朝倉伊八の名前の上に墨書で住所が付されているが、いずれも版元の住所をまねた落書だと思われる。一貫齋金交については不明であるが、朝倉伊八は曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』でも彫りを務めている。

【八三】 俊傑神稲水滸伝 明治一五年刊 五冊

太政官記録局旧蔵「請求番号二〇四・〇一三一」

『俊傑神稲水滸伝』は二八編一四〇冊から成る読本の長大編で、初編は戯作者の岳亭丘山の手によって文政一一年に上梓された。そのあと、第五編で中断。以降、二八編までは知足館松旭の筆によるものである。当文庫所蔵の本書はこのうちの最後の第二八編五冊に相当する。明治一五年の刊行である。

作者は大坂の人で知足館松旭（友鳴吉兵衛）。友鳴松旭和とも号した。幕末から明治にかけて多く読本を手掛けた戯作者で、また同時に絵師でもあり特に咄本などの挿絵を多く手がけている。他の読本作品には『絵本佐野報義録』『北条五代実記』などがある。本書の末尾⑤二一ウには松旭の

作品の広告が以下の通り出している。

「知足館松旭著／俊傑神稲水滸伝 廿九篇五冊近刻／右同著／絵本佐野報義録 全廿六冊／八島五岳翁遺稿／海川夜話仙家月 二篇五冊近刻／知足館松旭著」

ここには、松旭の他作品の他、本書『俊傑神稲水滸伝』の第二九編の予告がされているが、実際に出版されたかは疑問である。

本書の絵師は、千錦亭富雪（六花亭富雪とも）で、幕末から明治にかけて活動した上方の絵師である。来歴は詳らかではないが、本書の他に挿絵を手掛けたものとして、弘化二年版『菅原伝授手習鑑』、同年版『頼光大江山入』、また刊年不明本『絵本武勇録』などがあり、武者絵を得意としたことが想像される。本書においてもその力量は大いに発揮され、冒頭の四図は無頼の登場人物の肖像を描いている。この四図に限り多色刷がされている。また③一ウでは、挿絵が匡郭を飛び出すなどの読本特有の工夫も施している。見返しには本書の内題が出されているが、この部分は巴紋を散らした枠が描かれ青色で刷られている。表紙にも巴紋と花菱紋が型押しされているが、これは神洞信行・稲場鬼門の主人公二人の家紋を表したものと思われる。

物語の発端は、康暦二年の小山義政の乱である。小山義政の妾・稲場の子である稲場鬼門は鎌倉に謀反を起こし、無頼の輩を靡下に山洞に拠る。一方、小山義政の乱で寄せ手の大将であった小幡信親は無実の罪で死去、その子であった神洞信行は追放されてやはり鬼門同様に無頼の輩を従えて庚申山に拠る。鎌倉方に恨みを抱く鬼門と信行は、両者相乱れて鎌倉幕府と対峙する。そこに『水滸伝』の趣向をとって、個性的な英雄たち、妖婦、怪盗などが登場し、物語は複雑に展開する。

本書では、鬼門の切腹で幕を閉じる。積悪の鬼門が死ぬことによって勧

善懲悪を一貫して述べ、物語を終幕させようとしたものとみられるが、先に述べたように、本書にはまだ続きの予定があったと思われる、これが作者の松旭の意図通りであったかどうかは定かではなく、ましてや初編を書いた岳亭丘山の構想通りであったかどうかは疑わしい。

文政年間から書き継ぎ書き継ぎされてきた本書は、読本の中でも最も長大であるとされる『南総里見八犬伝』に次ぐ大著となった。

なお本書は太政官記録局の旧蔵書で、「太政官記録印」の蔵書印が押されている。この印が使用されたのは明治一八年までである。

【書誌】

外題・「友鳴／吉兵衛／著述／俊傑神稲水滸伝 廿八編 一（一五）」左

肩黄色料紙四周双辺刷題簽（二五・五糎×三・〇糎）

内題・「俊傑神稲水滸伝」

表紙・原裝萌黄色花菱巴紋型押表紙（二一・八糎×一五・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二四丁（八図）、②二〇丁（六図）、③

二二丁（六図）、④二〇丁（六図）、⑤二二丁（六図）

匡郭・四周双辺（一八・〇糎×一三・〇糎）

印記・「太政官記録印」

備考・序文匡郭は四周双辺（一七・三糎×一三・〇糎）、

【刊年・刊行者】

本書の刊記は以下の通りである。

「明治十五年季九月廿日出版御届／編輯者 大坂府平民 友鳴吉兵衛

北区川崎町三十八番地／出版人 同府民 大野木市兵衛 南区心斎橋筋一

丁目七番地」

刊年は明治十五年。序文も明治十五年である。

編集者として名前が挙げられている友鳴吉兵衛は、本書の著者である知

足館松旭のこと。出版元は、大野木市兵衛とあるが、近世前期から活動した上方書肆の老舗秋田屋市兵衛のことである。本姓は大野木氏で、号を宝文堂とする。本書見返しに出されている内題には「浪速宝文堂」とある。

なお、刊記のあとには、「発行書房」として、東京と京都の書肆名が、「発行書肆」として、大阪の書肆の名前が列挙されている。

【八四】鎌倉年代図会 天保一五年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇一〇三二

本書は一般的な書名では『鎌倉年代記』として知られる読本で、源頼朝以降源氏將軍三代の事跡を簡略に記述して絵本に仕立てたものである。五卷五冊で天保一五年に刊行された。ただし、本書には続く第二編の刊行予定があったものと思われ、その広告が⑤一八才に記載されている。

「甲辰冬月発兌 平林堂梓／鎌倉年代図会／此集の大意は宗尊親王鎌倉着御より時頼公の仁德行脚／の説青砥の明断蒙古の兵船神風に破れし事日蓮の弘法／諸臣の行跡高時の逸遊後醍醐帝の御始末楠新田諸將／の戦功北条の滅亡大塔宮の危難將軍に任じ給ふ事朝廷の／御政務天下一統まで数百年の動静を巨細に著せり」

これを読む限り、続編では元寇や鎌倉幕府滅亡の顛末までを書く予定であったが、結局刊行されなかったものと思われる。初編にあたる本書は、源頼朝元服から、宗尊將軍を鎌倉に迎えるまでの物語になっている。五卷五冊で每半葉一行・各冊約二〇丁という少ない分量ながら、平家追討、奥州藤原氏追討から鎌倉開府、梶原合戦、和田合戦、三代將軍実朝暗殺まで、濃密な内容が簡略にわかりやすく描かれる。物語の筋を追うものとい

うより、絵を楽しみながらわかりやすく歴史を学ぶための本であったと思われる。

著者は高井蘭山。もとは江戸芝伊皿子御組屋敷の与力であったが、寛政頃から執筆活動を始め、生涯を通して往来物・女訓書などの婦女子向け俗解本の編集にあたった。享和三年に初めて手掛けた読本『絵本三国妖婦伝』が当たり、以降、読本作者としても活動した。文化文政年間にかけて出版された『星月夜頭晦録』で初めて歴史に取材し、鎌倉ものを描いた。本書はこの作品の直接の影響下にあるといわれている。ただし、高井蘭山は天保九年に七七歳で没しているため、本書はその死後に出版されたものであると思われる。

絵師は二代柳川重信。初代重信は葛飾北斎の弟子で婿養子にもなっており、『南総里見八犬伝』の挿絵も手掛けた。その弟子で当初は重山と名乗っていた二代重信も、師同様読本の挿絵を多く手掛けている。本書の他にも『絵本梅花春水』『絵本呉越軍談』などを挙げる事ができ、また師の仕事を継いで『南総里見八犬伝』の挿絵も担当している。ただし、評価はその師よりもやや低い。俗称は谷城季三太。妻は初代重信の娘で、北斎の孫娘にあたる。

本書の挿絵はまず冒頭に、見開きで著名な場面の絵を集めている。総目録の上半分には鶴ヶ岡の遠景を入れ、各話の扉には笹竜胆（源氏の紋）を施す。見返しには、大樹の絵を出し中に内題を入れている。

なお、本書は昌平坂学問所記録調所の旧蔵。天保一三年以降義務付けられた検閲を受けた証として「新刊納本」の墨印が押されている。

【書誌】

外題・「鎌倉年代図会 一（一五）」左肩朱色唐花型押料紙四周双辺刷題
 簽（一五・〇糹×三・〇糹）

内題・「鎌倉年代図会」

表紙・原装浅葱色梅雪輪文様刷表紙（二二・五糹×一五・八糹）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二二丁（二二図）、②一八丁（七図）、③一八丁（六図）、④二二丁（六図）、⑤一八丁（六図）

匡郭・四周単辺（一八・二糹×一三・五糹）※序文のみ四周双辺

印記・「昌平坂」「番外書冊」「史伝戴紀」「新刊納本」「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・見返しは朱色料紙、大樹の絵の中に内題を入れる。②飛丁あり。③飛丁あり。裏表紙見返しの前に遊紙一丁あり。④飛丁あり。

【刊年・刊行者】

本書の末尾⑤一八ウに刊記は次のように出されている。

「蘭山 平林庄五郎 編述／柳川重信 画図／天保一五稔甲辰春月／吉旦発行／東都書房／両国米沢町 釜屋亦兵衛／本所松坂町 平林庄五郎」

これによれば、版元は江戸の釜屋と平林屋である。釜屋又兵衛はもとは貸本屋であった。本書の出版される少し前に江戸両国広小路吉川町から、両国米沢町三丁目新七店に移転したようである。中金堂・宝聚堂などと号した。平林屋庄五郎は多く人情本を手掛けた書肆で、曲亭馬琴も『南総里見八犬伝』をこの平林屋から刊行する予定であった。しかし、初代庄五郎は文化一一年に七〇歳を迎え、高齢を理由にこれを他の書肆へと譲っている。したがって本書の出版を手掛けたのは二代庄五郎であると想像される。

【八五】 絵本呉越軍談 明治一五年刊 一〇冊

大政官記録局旧蔵「請求番号二〇四・〇一三二」

本書は嘉永六年に出版された読本『繪本呉越軍談』の明治刷である。呉越を巡る故事を三〇卷三〇冊にまとめ、漢字平仮名交じりの平明な文章と多くの挿絵とでわかりやすい読み物としたもの。当文庫が所蔵するのはこのうちの最後の部分に相当する第三編一〇卷一〇冊である。蘇秦張儀の合従連衡策から、秦の始皇帝による天下統一までが描かれる。

本書の元となっているのは元禄一六年に一八卷一八冊で出版された『通俗呉越軍談』である。ただし、これには挿絵がなく、漢字片仮名交じりの本文を持つため、やや難解なものであった。この本文を平仮名交じり文に直した給人補訂版が本書に当たる。

著者は池田東籬。幕末の京都で活動した読本作家であったが、もとは朝廷の主殿寮佐伯方下司官人で最後は左馬大允を務めた。読本だけでなく、節用集や重宝記などの著作も多く、多種多様なものを手掛けたためその作品数は数えきれないほどにのぼる。本名は源正韶、字は鳳卿。東籬亭、菊人とも号す。

挿絵は前掲書と同じ二代柳川重信。

本書の挿絵はすべて見開きで各冊三箇所ずつ添えられている。ただし、第一冊目のみ冒頭に登場人物の肖像が入り、この四図のみ多色刷である。

見返しには内題が出されているが、この部分には萌黄色に雲母引の料紙が使われている。表紙は空押で龍・虎・鼎の文様が出され、中国風の装丁を意識していると思われる。

なお、本書は太政官記録局の旧蔵書である。「太政官記録印」の蔵書印が押されている。前掲の『繪本太閤記』『俊傑神稲水滸伝』と表紙や題簽も類似している点からみて、同時期に太政官記録局に収蔵されたものか。

【書誌】

外題・「繪本呉越軍談 三編 一（一十）」左肩黄色料紙四周双辺刷題簽

（一四・五糎×三・五糎）

内題・「繪本呉越軍談」

表紙・原装紺色鼎竜虎紋型押表紙（二二・〇糎×一五・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二七丁（二〇図）、②二五丁（六図）、③

二四丁（六図）、④二三丁（六図）、⑤二四丁（六図）、⑥二六丁（六図）、

⑦二五丁（六図）、⑧二五丁（六図）、⑨二三丁（六図）、⑩二八丁（六図）

匡郭・四周単辺（二七・八糎×二三・二糎）※序のみ四周双辺

印記・「太政官記録印」

【刊年・刊行者】

刊記は⑩二八才に次の通りある。

「明治一五年四月廿五日御届／定価金壹円五拾銭／出版人 京都府平民

井上治兵衛 上京区茅廿七組土橋町四番地」

この刊記の記された二八丁目は、嘉永六年版の刊記と差し替えられたもの。二八ウには「発売所」として、大阪と京都の書肆が列挙してある。

出版元の井上治兵衛は、京都の越後屋治兵衛のこと。

【八六】繪本豊臣勲功記 明治二五・一七年刊 二〇冊

太政官記録局旧蔵 「請求番号二〇四・〇二二八」

本書は太閤豊臣秀吉の一代記で幕末から明治にかけて全九編九〇冊で出版された軍談系の読本である。当文庫が所蔵するのはこのうちの第八編と第九編を合わせた計二〇冊である。初編は安政四年の出版だが、本書は第八編が明治一五年に出版され、第九編が明治一七年に出版された。

秀吉の四国平定・九州平定までの戦いを武将たちの逸話に沿って描き、

北野大茶会で天下泰平を祝い終幕する。太閤豊臣秀吉の一代記で、先行する『絵本太閤記』などの記述とあまり変わりはないが、繰り返し太閤記ものが出版されたことを踏まえると、本書のような読本が明治に入っても根強い人気を持っていたことを窺わせる。

作者は柳水亭種清。本書での名義は通称であった桜沢堂山になっている。他には淫水亭・八功舎徳水などの号もある。幕末から明治にかけて活動した戯作者で、時宗の僧であった。不行跡によって寺を追われたあと、河竹黙阿弥に入門して執筆を始めたとされる。そのうち柳下亭種員の門下となり芝居を小説化した合巻作者として活躍した。明治維新後には僧籍に復帰しており、本書はおそらくその頃に筆をとったものと思われる。明治四〇年に没した。

挿絵は松川半山。翠栄堂半山とも。柳水亭種清と同様に幕末から明治にかけて活躍した絵師で、名所図会や狂歌本の挿絵を多く手がけている。維新後は啓蒙書や教科書の挿絵を製作した。明治一五年に没しているため、本書第九編はその死後の出版となった。

なお初編・第二編の挿絵は歌川国芳の手によるものである。第三編以降に弟子の歌川芳房が補助に入った。松川半山が絵師としてそれらを継いだのは、文久三年に出版された第六編からである。

第八編第一冊および第九編第一冊には、冒頭に登場人物の肖像が多色刷で入る。特に第八編第一冊は一オウ四ウの計七図が多色刷である。第九編第一冊は四図のみだが、五図目には豊臣秀吉所用の軍配の縮尺図が描かれている。また、第九編第一〇冊目の一四ウと一五オは、北野大茶会について秀吉が布告した高札の縮尺図となっていて、本文の中に挿絵が入りこむ形になっている。挿絵のほとんどが見開き。最も絵師の気力が注がれているのは第八編第九冊で、加藤清正が化け猫や大蛇と戦う場面に多くの挿絵

が添えられ、一冊に一二図挿入された。各冊冒頭の目録には、背景に瓢箪唐草の挿絵。また、見返しの内題にも背景に挿絵が入っており、第八編は五三の桐（豊臣秀吉の紋）と桔梗（加藤清正の家紋）、第九編は、波に島津十字が描かれている。これはそれぞれの編で中心となる人物・加藤清正と島津義久を表現したものである。本書の表紙も、空押で瓢箪唐草の地に五三の桐が出されており、秀吉を象徴した表紙になっている。

なお、本書は太政官記録局の旧蔵書。前掲の『絵本太閤記』『俊傑神稲水滸伝』『絵本呉越軍談』と表紙や題簽も類似している点からみて、同時期に収蔵されたと思われる。

【書誌】

外題・「絵本豊臣勲功記 八編（九編）巻（十）」左肩黄色料紙四周双辺刷題簽（二六・八糎×三・六糎）

内題・「絵本豊臣勲功記」

表紙・原裝瓢箪唐草地五三桐型押文様表紙

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（一五図）、②二六丁（六図）、③二四丁（六図）、④三〇丁（六図）、⑤二八丁（六図）、⑥三〇丁（六図）、⑦二五丁（六図）、⑧二九丁（六図）、⑨三六丁（二二図）、⑩二四丁（六図）、⑪三七丁（一五図）、⑫三三丁（八図）、⑬三二丁（一〇図）、⑭二八丁（一二図）、⑮四〇丁（一〇図）、⑯三〇丁（一〇図）、⑰三四丁（一〇図）、⑱三七丁（一〇図）、⑲四六丁（一〇図）、⑳三二丁（一〇図）

匡郭・四周単辺（一八・〇糎×一三・四糎）

印記・「太政官記録印」

備考・⑮⑯第一丁目の目録部分欠。

【刊年・刊行者】

本書の第八編の末尾には次のような刊記がある。

「明治十四年六月十五日版權免許／同十七年出版／編輯人 東京府民 桜沢堂山 東京芝区桜田備前町四番地／出版人 大阪府民 岡田茂兵衛 東区博労町四丁目十七番地／同 同 松村九兵衛 南区心齋橋筋壹丁目四十三番地／発売人 東京府民 山中市兵衛 東京芝区三島町九番地」

第九編の刊記にはこれに加えて、発売人に「東京府民 吉川半七 東京京橋区南伝馬町一丁目十二番地」とある。

編輯人となっている桜沢堂山は著者の柳水亭種清のこと。版元として名前が挙げられている岡田茂兵衛は、貞享年間頃から活動している大阪の書肆河内屋茂兵衛のことである。見返しの内題にはその号である群玉堂を出してある。同じ大阪の版元として並んでいる松村九兵衛は、心齋橋筋の書肆敦賀屋九兵衛のこと。号は文海堂で、やはり内題に記載がある。発売人として東京の売捌所は山中市兵衛とあるが、これは甘泉堂和泉屋市兵衛のこと。江戸前期からの老舗で、明治に至るまで特に黄表紙合巻の版元として活動した。

第九編の刊記に追記されている吉川半七は、文久三年に近江屋嘉兵衛に養子入りして幕末から明治にかけて活動した近江屋半七のこと。現在の吉川弘文館である。

【八七】南朝外史武勇伝 明治一六年刊 五冊

太政官記録局旧蔵「請求番号二〇四・〇一六」

本書は安政年間から出版が始まった南北朝時代を舞台にした軍談系の読本である。最終的には、幕末から明治にかけて全五輯二五冊が出版されたが、本書はそのうちの第五輯五冊に相当する。冒頭には文久二年の序を載

せるが、刊記によれば刊行年は明治一六年。太政官記録局の旧蔵書で、おそらく新刊として納本されたもの。

作者は梅亭金鷲（内題には椽亭主人とある）。元は江戸両国薬研堀の御家人で、筆耕から戯作者の道へと進んだ。前掲『源氏一統志』の作者・松亭金水の弟子にあたる。幕末から明治にかけて活動、明治二六年に没するまで精力的に執筆を続けた。明治になってからは雑誌『团团珍聞』の主筆を務め、新時代を風刺した『妄想未来記』などを発表した。本書においては先行する実録物『慶安太平記』を原拠として製作したとみられている。

絵師は歌川貞秀（橋本貞秀とも）。三世歌川豊国の国貞時代の門人にあたる。美人画・武者絵・風景画・团扇絵などの評価が高い。慶応二年のパリ万国博覧会では、歌川芳宗と共に浮世絵師の総代を務めた。横浜絵の第一人者で鳥瞰式の構図を得意とし、本書の挿絵にも多くこの構図が用いられている。また武者絵の評価も高く、本書の冒頭の武者絵は多色刷りで表現された。本書の挿絵はすべて見開き。墨の濃淡を用いた陰影表現がみられる。

本書の表紙には、型押で菊水紋があしらわれており、これは楠木正成を表したものである。見返しに内題が出してあるが、その枠も紺色で菊水が刷られている。⑤二〇オ～二三ウまで、版元・伊丹屋善兵衛の広告が出してある。二〇オには『絵本石山軍記』。二一オからは、目録題として「軍書小説類蔵版目録」という項目が立てられており、以下に軍書系小説の一覧が並んでいる。

【書誌】

外題・「南朝外史武勇伝 五輯 巻（一）伍」左肩朱色料紙四周双辺刷題
簽（一五・三種×三・六種）

内題・「南朝外史武勇伝」

表紙・原裝紺色菊水紋型押表紙（二二・〇糎×一五・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一九丁（二〇図）、②一八丁（六図）、③

二〇丁（六図）、④二二丁（六図）、⑤二四丁（四図）

匡郭・四周単辺（一七・三糎×一一・三糎）

印記・「太政官記録印」

備考・③一一才朱落書あり。⑤飛丁あり。

【刊年・刊行者】

本書は文久二年の序を持つが、刊行は明治一六年。⑤二四才の刊記は以下の通り。

「明治十六年七月廿八日出版御届／同年十一月刻成／編輯人 京都府士

族 加藤伴之 東区内本町二丁目壱番地寄留／出版人／大阪府平民 前川

善兵衛 東区南久宝寺町四丁目八番地／出版人 大阪府平民 岡田茂兵衛

東区博労町四丁目十七番地」

編者として記載のある加藤伴之は『広益いろは字典』などの編者だが、地図・往来物の再版の編修を中心に活動していたようである。

前川善兵衛は、大阪の老舗の書肆伊丹屋善兵衛。寛文年間頃には出版に

携わっていた。号は文栄堂。岡田茂兵衛は、やはり大阪で有数の書肆河内

屋茂兵衛のこと。号は群鳳堂群玉堂など。ただし、見返しの内題には「文

魁堂・群鳳堂」と出してある。

【八八】 日本開闢由来記 万延元年刊 七冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇一四〇」

一般には書名を『大日本国開闢由来記』とされる本書は、安政三年に初

版された。本書はその後印にあたる万延元年版である。本邦の由来をまとめたもので、『古事記』『日本書紀』の記述を抄出して読本として改めたもの。基本的には二ニギノミコトの天孫降臨から始まり、聖徳太子の登場までが描かれるが、さらにその後日譚として元寇が描かれる。これは「神風」が本邦を守ったことで、神国の証として述べたもの。

本書の他に安政三年版、安政五年版、文久元年版などがある。

作者は平野元良。本書では一夢道人指漏漁者の号を用いている。生年未詳、慶応三年没。江戸両国薬研堀で開業していた医者で、その著作のほとんどは医療に関するもの。本書のような作品は珍しい例。医学を多紀元堅に学んだ。

絵師は歌川国芳。異色の絵師として現代なお人気の高い絵師であるが、それまでの絵師同様読本挿絵の絵師としての人気から出発した人物である。文政年間に、馬琴の『傾城水滸伝』のヒットに伴う『水滸伝』ブームの中、水滸伝の豪傑を描いたシリーズで「武者絵の国芳」と称されて、その人気を確固たるものにした。錦絵の題材にも、読本・稗史を題材にしたものが多い。

本書はふんだんに国芳の絵が添えられ、薄墨の濃淡や空押し、四枚続きなどを用いて様々な工夫がなされている。国芳の人氣に預かった出版であったことが想像される。例えば本書は首巻一冊を附した全六巻全七冊であるが、首巻は序文と図版を載せ、ほぼ国芳の画集といってもよい。日本神話の神々を色刷で描いていて、その上、匡郭がすべて勾玉の首飾りで描くという工夫がなされている。本文に挿絵が入りこんでいる箇所もある。また巻一の挿絵には「奇魂」を表現するために薄墨で浮かび上がる人影を書いており、国芳らしい様々な工夫を指摘することができる。巻二では、火を放った産屋の中で豊玉姫が出産する場面があるが、この部分では一見

すると燃え上がる産屋しか描かれていないようにみえる。しかし、よくみると、産屋の中にうっすらと豊玉姫の姿が浮かび上がっているのである。これは空押を用いた表現で、墨は乗っていないが鮮明に見とることができ、本書の場合、かなり良い状態で維持されている。また、巻六の元寇の場面では、見開きを続けて四図を用いて、三箇所に渡り嵐の場面を描いている。

ただし、本書の巻三の四ウ・五オおよび一四ウ・一五オ・一五ウにおいては、挿絵を手掛けたのは国芳ではなく、福島隣春である。この部分のみ「藤原隣春」の署名が入っている。彼はもとは江戸浅草の質屋であったが破産してのち絵師となったといわれている人物で、幕末から明治にかけて活躍した。土佐派の絵を愛好。本書の作者である平野元良とは嘉永六年に『硝石製錬法』を製作している。手掛けたものには雑書の挿絵が多い。

なお、本書は昌平坂学問所記録調書の旧蔵。「新刊納本」の印があることから、天保一三年以降に義務付けられた検閲制度に則って学問所に提出されたものということがわかる。巻末に陽刻印「安政庚申」の印があることから、安政七年（万延元年）に新収されたものと思われる。刊記には刊年が「万延元庚申歳」とあるので、再版の際に学問所に提出されたことがわかる。

【書誌】

外題・「大日本国開闢由来記 首卷（巻一～巻六附記）」左肩朱色料紙四周双辺刷題簽（一六・七糎×三・〇糎）

内題・「日本国開闢由来記」

表紙・原装縹色鳳凰唐草紋表紙（二二・七糎×二五・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二九丁（二二図）、②二〇丁（六図）、③二二丁（九図）、④二二丁（六図）、⑤一八丁（六図）、⑥二四丁（六図）、

⑦三九丁（二六図）

匡郭・四周単辺（一七・六糎×一三・四糎）

印記・「安政庚申」「昌平坂」「番外書冊」「史伝戴紀」「新刊納本」「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・①扉「大日本国開闢由来記」朱色匡郭。裏面多色刷でスクナヒコナの挿絵。②一オ～五ウ序文陰刻。③一オ～九ウ凡例。④三七オ～三九オ跋文。

【刊年・刊行者】

刊記は⑦三六オに記載がある。

「右全部七卷附記一卷／江戸市井隠士一夢道人指漏漁者編述／全編三十六図／伊草孫三郎国芳画／首卷讚詞第一第二卷 宮城玄魚書／凡例及第三卷及附記 一木二夕書／第四第五第六卷 山口楽園書／彫工 朝倉伊八刀／安政三丙辰歳秋七月稟準彫刻／万延元庚申歳秋九月刷印発行」

以上の通り作者・絵師・筆耕・刻工の名前がすべて記載されており、分業の形態がわずかながらわかる。ただし、版元の記載はなく不明である。

【八九】日本国開闢由来記 明治刊 四冊

飯田春教旧蔵「請求番号二〇四・〇一四一」

本書は前掲書『大日本国開闢由来記』の明治刷であるが、刊記に刊年がないため再版された時期については定かではない。もとの刊記はそのままに最終丁に版元名を記した一丁が追加されている。京都・東京・大坂・名古屋の四都一三書肆の連名である。

前掲書との大きな違いはまず本の大きさが異なる点。前掲書が二二・七

糶×一五・五糶であるのに対し、本書は二六・〇糶×一八・〇糶と一回り大きい。ただし版木は同一と思われる。また前掲書が全七冊であるのに対し、本書は四冊。丁付はもとのままなので、合冊された状態と同じ。さらに大きな違いは、挿絵である。多色刷の扉がはずされており、首巻は序文から始まっている。前掲書では色刷だった挿絵はすべて単色刷になっており、薄墨の陰影もほとんどつけられていない。また巻一で空押で表現されていた豊玉姫は薄墨に変更されており、全体的にグレードを落とした印象である。

飯田春教旧蔵書を、明治一二年に内務省が購入した。

【書誌】

外題・「大日本国開闢由来記」左肩四周双辺刷題簽（一八・〇糶×三・二糶）

内題・「日本開闢由来記」

表紙・原裝縹色布目型押表紙（二六・〇糶×三・二糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①三七丁（二五図）、②四三丁（一五図）、

③四二丁（二二図）、④四〇丁（二六図）

匡郭・四周単辺（一八・〇糶×一三・三糶）

印記・「飯田春教蔵書」「明治十二年購求」「大日本帝国図書印」「日本政

府図書」

備考・①一オ〜四ウ序文陰刻。④三六ウ元刊記。三七オ〜三九ウ跋文。

【刊年・刊行者】

刊記には刊年が出されていないため正確な出版年は不明。ただし、明治一二年以前の明治年間中であることには間違いない。

④四〇オに四都一二書肆の名前が出されている。

「京都御幸町通姉小路下ル 菱屋孫兵衛／同三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／同 寺町通三条下ル 著屋宗八／東京日本橋通一丁目 須原屋茂兵

衛／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝明神前 岡田屋嘉七／同両国横川町三丁目 和泉屋金右衛門／大坂 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛／同心齋橋安土町 河内屋和助／同心齋橋通博勞町 河内屋茂兵衛／同心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門／尾州名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎」

いずれも明治維新以前の屋号のまま記載。江戸期から続く老舗がほとんどである。

【九〇】日本国開闢由来記 明治刊 四冊

元老院旧蔵 「請求番号二〇四・〇一三九」

本書も前掲書と同じ『大日本国開闢由来記』の明治刷である。刊年の記載がなく正確な再版時期は不明であるが、前掲二書とは完全な同版である。

まず首巻の巻頭の挿絵が、元来は色刷であったものが単色になっている。ただし、薄墨を用いた陰影表現は前掲書よりもやはっきりしている。また②の空押で表現した挿絵も、薄墨での表現に変更しており、この点は前掲書と同一であるが、濃淡に微妙な違いがあり、同時期に刷られた同版本とみるのはやや無理があると思われる。版木の磨減をみると、本書のほうはやや進んでおり、本書のほうの時期が下ることが想像される。また一部に水損がみられる。

本書は元老院の旧蔵書である。元老院は明治八年から同二三年まで存続した。新収されたのはこの期間内で、少なくとも本書が明治二三年以前の版であることは指摘できる。

【書誌】

外題・「皇国開闢由来記」左肩四周双辺刷題簽（一六・〇糎×三・二糎）

内題・「日本国開闢由来記」

表紙・原裝黄檗色布目型押表紙（二二・五糎×一五・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①三八丁（二六図）、②四三丁（一五図）、

③四二丁（二一図）、④三九丁（一六図）

匡郭・四周単辺（一八・〇糎×一三・五糎）

印記・「元老院図書記」

備考・①扉なし、一オ〜四ウ序文。④三六ウ安政三年の元刊記、三七オ

〜三九ウ跋文。

【刊年・刊行者】

④三六ウに安政三年の元の刊記が付されており、その後跋文、そして新しい刊記という順になっている。四〇オには「東辟堂藏版発売書房」という題目が立てられており、そこに全国の書肆名が挙げられている。そして四一オのその末尾に「名古屋本町通八丁目 片野東四郎」と出している。

これは名古屋の大書肆である永楽屋東四郎のこと。出版がほとんど上方と江戸で占められていた中、三都の書肆以上に中京で最も発展した書肆である。前掲書では、四都一二書肆の一つに名を連ねているが、ここでは「東辟堂藏版」とあるので、前掲書の出版のち求版して改めて永楽屋から独占的に出版したものと想像される。ここに挙げられた全国の書肆名は売捌所。

【九二】漫遊文章 刊年不明 五冊

内務省地理局旧蔵「請求番号一七七・一一五一」

『漫遊文章』は寛政元年に須原屋茂兵衛から出版された紀行文で、本書はその後刷の刊年不明版に当たる。著者は漢学者の平沢旭山で、西は長崎、東は松前に及んだ自身の遊歴の記録を本書にまとめた。「河内遊記」から「金沢遊記」までの三三編に、旅行用具についてまとめた「遊具略」を加えて三四編五巻五冊で成る。流暢でわかりやすい文章ゆえに広く読まれて版を重ねた。本書に刊年の記載はないが、末尾には三都三〇書肆が連名になっており、その体裁からみておそらく幕末から明治にかけての出版であったろうと想像される。

著者の平沢旭山（名前は元愷）は昌平坂学問所に学んだ漢学者で、荷田在滿に律令を学び、また仏教にも通じた人物であった。学者としての著作も多いが、旅を好み、文章家として多くの紀行文も記している。本書はその代表作。

絵師は鈴木芙蓉。阿波徳島藩の御用絵師で山水画を能くした。皆川淇園や大田南畝と親交が深く、谷文晁や大岡雲峯は門人にあたる。本書ではその山水の技法を用いた風景画を寄せている。

本文は漢文に返り点と送り仮名が施されている。旅の記録を、風景、風俗、人間関係など、具体的かつ正確に記したという点において、歌枕探訪が主眼であったそれまでの紀行文とは一線を画す内容で、一八世紀から広まった漢文体の紀行文の特徴を備えている。挿絵は見開きが多く、文中の名所旧跡を鳥瞰で描いているものが多い。

本書は内務省地理局の旧蔵である。地誌編纂のための資料として収集されたものと思われる。

なお、当文庫には、本書の元となった旭山の文稿『兎道山人遺草』（写本）も所蔵されている。

【書誌】

外題・「漫遊文章」左肩黄色料紙四周単辺刷題簽（二二・五糎×二・五糎）
内題・「漫遊文章」

表紙・原装紺色雷文繫型押表紙（二八・三糎×二二・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①三三丁（八図）、②三七丁（一一図）、③

二七丁（五図）、④三七丁（一七図）、⑤三五丁（二図）

匡郭・四周単辺・有界（二三・六糎×九・五糎）

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」「朝田」（楕円型陽刻印〇・

八糎×〇・六糎）不明印記「天上」（長方陽刻印五・二糎×二・二糎）不明印

記「松（以下判読不能）」（長方陽刻印五・五糎×三・二糎）

備考・裏見返しの裏に不明印記二種（「天上」「松（以下判別不能）」）。

【刊年・刊行者】

本書の刊記には刊年を欠くため、正確な出版時期は不明だが、寛延元年版の後刷で幕末頃に出版されたものと思われる。三都三〇書肆が連名になっているが、見返しには「江都書林青雲堂板」と出している。これは、江戸下谷御成道の英屋文蔵のことと思われる。東叡山御用書物所。

【九二】熊野遊記 寛政一三年刊 三冊

内務省旧蔵「請求番号一七七・一一二二」

本書は熊野の名勝を訪ねた漢詩紀行文で、それに二巻の風景画を併せて全三巻三冊で出版されたもの。三巻は、天・地・人に分けられており、天の巻に、熊野の名勝についての解説と本文、地の巻と人の巻に、絵師・鈴木芙蓉による風景画が配されている。本文は平易な漢文体で、作者の北圃格斎が元文二年に郷里・栖原を出て道成寺を参詣し、日高川を渡って上野

村、境村を経て熊野本宮に至り、那智の奇勝を巡って再び栖原に戻るまでの記録がつづられている。

作者の北畠格斎は、江戸の書肆である四代目須原屋茂兵衛のことである。本貫が紀伊国有田郡栖原村であった。伊藤仁斎の五男蘭岨（紀州藩儒者）に漢学を学んでいる。鈴木芙蓉の序文によれば、本書は格斎の没後、六代目・茂兵衛がその遺稿に芙蓉の挿絵を添えて出版したものであるらしい。芙蓉はこの六代目茂兵衛の求めに応じ、寛政五年に熊野を取材旅行している。芙蓉は本書の他にも那智の滝を題材とした一連の作品を残しているが、それらもこの取材で得た画題によるものである。

なお、本書は、明治一四年に内務省が購入したもの。

【書誌】

外題・①「熊野遊記 天」、②「熊野名勝図画 地」、③「熊野名勝図画 人」左肩四周単辺刷題簽（一八・四糎×三・〇糎）

内題・「熊野遊記／名勝図画」

表紙・原装海松色唐草型押表紙（二五・三糎×一七・八糎）

墨付丁数・①三三丁、②二〇丁、③三三丁（②③はすべて絵）

匡郭・左右双辺・有界（二〇・〇糎×一四・二糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十四年購求」「日本政府図書」不明印記（判別不能）（三・八糎×二・二糎）

備考・見返しには次のように出している。「北圃格斎著／木芙蓉先生絵

／熊野遊記／名勝図画／合刻／三冊／東都 北圃氏千鍾書房蔵版」

【刊年・刊行者】

③二二才の刊記は以下の通り。

「寛政辛酉子丑春／東都 書林 須原屋茂兵衛」

寛政辛酉は寛政一三年である。出版は北圃格斎の孫にあたる六代目・茂

兵衛頭光。

なお、刊記の直前には、須原屋の手による鈴木芙蓉の著作の広告が枠内（四周単辺二八・七糎×六・七）に出してある。

「芙蓉先生著／費漢源山水画式 全三冊／同後編 全三冊 近刻／新撰名山勝概図 全三冊 近刻」

これによっても須原屋と芙蓉の密接な関係が窺われる。

【九三】雲遊後録 享和元年 三冊

昌平坂学問所史局旧蔵「請求番号一七七・一一五〇」

本書は享和元年に須原屋茂兵衛から出版された紀行文『雲遊後録』の初版に相当する。作者の北陸紀行から中山道紀行について描かれ、上中下三冊で構成される。序文によればこれに先行する作品として『雲遊前録』という同一作者の紀行文があったようだ。

作者は漢学者の関赤城。上野国沼田の荒物商に生まれ、商用で江戸に赴くが、そのまま書籍を購入して勉学の道へ進んだという。特に兵学に関しては造詣が深く、柳川、久留米、福岡の諸藩に出仕している。寛政元年には、幕臣の青島俊蔵に従って蝦夷地を訪れ、紀行文『蝦夷風土記』を記している。本書を含め、紀行文の著作が多く、文章家としての一面を備えていた。本書はその代表作。上巻冒頭の北陸紀行は、越前丸岡藩に出仕すべく板橋を出発し、二二日間で一〇〇里を踏破した記録となっている。本書には紀行文中で訪れた景勝地の風景画が添えられている。

なお、本書は、文化七年に昌平坂学問所に設置された史局の旧蔵。史局では全国的な地誌の編修を行い、その資料として全国の地誌・紀行・地図

類を収集した。本書はそのとき収蔵されたものである。その際「編修地誌備用典籍」の朱印と併せて表紙に「総記」「別記」「遊記」「異国」など四種の木版刷りの貼紙がされるのが通例であるが、本書にはそれがなく、おそらく改装の際に脱落したと思われる。

【書誌】

外題・「雲遊後録 上（下）」左肩無地題簽に墨書（一一・二糎×一・七糎）
内題・「雲遊後録」

表紙・改装香色表紙（二七・〇糎×一一・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（六図）、②二七丁（八図）、③三五丁（四図）

匡郭・四周単辺・有界（一三・〇糎×八・九糎）

印記・「編修地誌備用典籍」「秘閣図書之章」「日本政府図書」（蔵書表）
備考・見返しに内題および魁星印（直径五・五糎）有り。

【刊年・刊行者】

③三五才の刊記は以下の通り。

「懐風館蔵版／関赤城先生著／享和元年辛酉七月／東都 須原屋茂兵衛」

懐風館は関赤城の堂号。享和元年に江戸の書肆の須原屋茂兵衛によって出版された。前掲書と時期が離れない点からみて、手がけたのは六代目茂兵衛であろう。

【九四】雲遊文蔚 享和二年刊 五冊

内務省地理局旧蔵「請求番号一七七・一一四一」

本書は享和二年に須原屋茂兵衛から出版された漢詩紀行文『雲遊文蔚』

の初版に相当する。五卷五冊。作者が寛政一一年三月に江戸を発ち、東海道を経て伊勢へ赴いた記録と、宇治から奈良の古刹を巡った記録、和歌の浦に遊び、和泉に入り浪速に至るまでの記録などで構成されている。巻一には、姫路藩主酒井忠道の序と大僧都智賢の序が置かれている。巻三の七ウまでが紀行文で、以下は雑文となる。

作者は山谷瑞泉寺の僧積大任。積瑞泉、墨庵とも。本書では瑞泉墨庵和尚の名義になっている。「学徳円満」の僧と称され、多くの著作がある。

本書で特徴的なのは、挿絵がすべて別々の絵師によって描かれている点である。これは見返し部分にも内題とともに「諸名家画図纂輯」と出しており、多くの絵師が参加したことが本書の売りのひとつであったと思われる。⑤四八ウには「巻中画図名氏累記」と題して、本書に絵を添えた三〇名の絵師の名前の一覧が載る。挿絵はすべて見開き。山水風に紀行文中の名勝を描いたものが多いが、故事から引いた人物画や動物もしばしば描かれている。

なお、本書は内務省地理局の旧蔵。それ以前の所蔵者のものと思われる墨書の書き入れがある。

【書誌】

外題・「雲遊文蔚 卷之一（一五）」左肩四周双辺刷題簽（一八・八糶×四・〇糶）

内題・「雲遊文蔚」

表紙・原装小豆色飛雲唐花丸文様艶出表紙（二六・五糶×一八・〇糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①四四丁（一六図）、②四一丁（一六図）、

③四四丁（一六図）、④四五丁（二〇図）、⑤四九丁（二二図）

匡郭・四周単辺・有界（一八・八糶×二二・五糶）

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」（見返しに壺印あり）

【刊年・刊行者】

⑤四九オに次の通り。

「共和二壬戌年九月梓行／書肆 江戸日本橋 須原屋茂兵衛／彫工 芝神明町 山口七兵衛」

版元は前掲書と同じ江戸日本橋の須原屋茂兵衛。時期的にみて本書も前掲書同様に六代目茂兵衛の手によるものと想像される。見返しには「山谷般舟楼蔵版」と出ているが、般舟楼は作者である墨庵大任の堂号。

刊記にある彫工の山口七兵衛については詳細不明。安永三年版『艸右記』に名前のみえる彫工の山口東川と関係あるか。

なお⑤四九ウには広告が出してある。

「東都瑞泉寺般舟楼蔵版書目／墨庵夜話 墨庵師著 全一卷／元亨釈書輔 玷 同師著 十二卷／臨終指南鈔 縁山嶺誉大僧正閣 墨庵師積 全一卷／菟道夢枝啞哩 同師著 二卷／雲遊文蔚 同師著 五卷／仏舍利考 同師著 一卷／追追梓行」

【九五】雲遊文蔚 享和二年 五冊

昌平坂学問所史局旧蔵「請求番号一七七・一一一七」

本書は前掲の『雲遊文蔚』の同版本である。前掲書と比較すると、版木の磨滅などもあまり見られず、ほぼ同時期に印刷されたものと想像される。状態は本書のほうがややヤケが少ない。大きく相違する点は、見返しの料紙が、前掲書が黄色であるのに対し、本書は薄紅色である点である。

また、前掲書は内務省地理局の収集したものであったが、本書は昌平坂学問所に設置された史局が、全国の地誌編修のために収集したものである。

修地誌備用典籍」の朱印に併せ、表紙に木版刷りの小片で「総紀」の貼り付けがある。また、本書の表紙には、墨書の小片「徳川家達献本」の貼り付けがある。これによるならば本書は徳川家達（田安家七代当主・徳川宗家一六代当主）から昌平坂学問所に献納されたものである。

【書誌】

外題・「雲遊文蔚 卷之一（五）」左肩四周双边刷題簽（二七・〇糶×一八・二糶）

内題・「雲遊文蔚」

表紙・原裝小豆色飛雲唐花丸文様艶出表紙（二七・〇糶×一八・二糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①四四丁（一六図）、②四一丁（一六図）、

③四四丁（一六図）、④四五丁（二〇図）、⑤四九丁（一二図）

匡郭・四周单边・有界（一九・〇糶×一二・五糶）

印記・「編修地誌備用典籍」「秘閣図書之章」（甲種・丙種）「日本政府図

書」（蔵書表）（見返しに壺印あり）

【刊年・刊行者】

⑤四九才の刊記は前掲書と同一。

「共和二壬戌年九月梓行／書肆 江戸日本橋 須原屋茂兵衛／彫工 芝神

明町 山口七兵衛」

【九六】北遊紀行 安政四年刊 一冊

東条琴台旧蔵「請求番号一七七・一〇六二」

本書は、作者である高橋克庵の江戸から新潟へ至る旅について書き記した漢詩紀行文である。作者が目にしたであろう旅先での風景が挿絵として

添えられている。すべて見開き。

高橋克庵は、江戸時代後期の漢学者で、朝川善庵の門人。別号に子欽。生まれはもとと常陸で、江戸の人であったが、生没年など詳細ははっきりしない。しかしその著作は多く、本書の他に『南遊紀行』『海府遊記』『大泉行』などがある。これらはすべて紀行文である。

本書は、嘉永七年に江戸を出発、板橋から足利を経て新潟へ赴いた際の記録。

なお、本書は東条琴台の旧蔵書。東条琴台は、幕末から明治にかけて活動した漢学者で、嘉永元年には『伊豆七島図考』を著して幕府の怒りをかい、一時期、高田藩邸に幽閉されたことがある。しかしまもなく許され、そののちは、藩校修道館教官を務め、明治維新後は神祇官・亀戸神社祀官を務めた。本書にはその蔵書印「掃葉山房蔵書」をみる事ができる。また、本書には「不羈斎図書記」の印もあり、秋山不羈斎の所蔵であった時期もあることがわかる。明治一四年に内務省が購入した。

【書誌】

外題・「北遊紀行 全」左肩四周双边刷題簽（一七・二糶×三・二糶）

内題・「北遊紀行」

表紙・原裝金茶色横刷毛目表紙（二三・五糶×一六・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三三丁（一二図）

匡郭・四周双边・有界（一八・〇糶×一三・〇糶）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十四年購求」「日本政府図書」「不羈斎

図書記」「掃葉山房蔵書」

【刊年・刊行者】

本書には刊記がないが、見返しに内題・刊年・刊行者が出してある。黄色料紙。

【安政四丁巳新鐫】克庵居士著／北遊紀行／日新書屋板

これによれば出版は安政四年。版元は、横浜の日新堂師岡屋伊兵衛か。

【九七】北遊紀行 安政四年 一冊

内務省旧蔵「請求番号一七七・一〇六三」

本書は前掲書『北遊紀行』の同版本。明治一五年に内務省が購入したもの。

本書は裏表紙に旧蔵者のものと思われる落書きがある。墨書。

【絶海連】百万兵雄／心落々【胡城三更】夢覚幽窓下唯有／秋声似兩耳／夢改米利堅／北陸男子／弥岳

【書誌】

外題・「北遊紀行 全」左肩四周双辺刷題簽（一七・二糶×三・二糶）

内題・「北遊紀行」

表紙・原裝金茶色横刷毛目表紙（二三・五糶×一六・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三三丁（二二図）

匡郭・四周双辺・有界（一八・〇糶×一三・〇糶）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十五年購求」「日本政府図書」「山本文庫」（二・六糶×二・三糶）

【刊年・刊行者】

本書には刊記がないが、見返しに内題・刊年・刊行者が出してある。黄色料紙。前掲書に同じ。

【安政四丁巳新鐫】克庵居士著／北遊紀行／日新書屋板

【九八】月瀬記勝 嘉永四年序跋 二冊

内務省旧蔵「請求番号一七二・〇二八五」

本書は嘉永四年頃に初版された漢詩紀行文『月瀬記勝』で、現在の奈良県の東南端・月ヶ瀬村を旅した記録である。月ヶ瀬村は当時、十万本以上の梅林が咲き競い、近世の新たな歌枕となっていた。本書の他にも月ヶ瀬の観梅を描いた作品には、『月瀬梅花帖』などがある。しかし、その月ヶ瀬も当初はひなびた土地であり、とても旅人が宿することができるような場所ではなかったらしい。その月ヶ瀬を一躍有名にして、全盛期には一日に千人が訪れるという一大観光地になさしめたのが、本書『月瀬記勝』である。本書は当時の大ベストセラーであり、これによって京の紙価があがったとまでいわれている。

作者は斎藤拙堂。伊勢津藩に伺候した儒学者で、昌平黌に学び、古河精里門下の精鋭として活躍した。津藩郡奉行から藩校有造館督学を務める。安政六年に茶磨山に退隠し、慶応元年に六九歳で没した。蘭学・医学にも通じ、また武芸にも秀でていたといわれ、数多くの著作がある。随一の文章家として知られていたが、特に紀行文の名手とされた。生涯でおよそ一八の紀行文を残している。本書はその拙堂の著作のうち、最も著名な漢詩紀行文「梅谿遊記」を収録したものである。兄事していた頼山陽に添削を依頼して評語を得ている。

全一卷に一卷を添えた二冊。本書の題簽では上下ではなく乾坤で区別されている。挿絵は乾の巻の前半に「谿山精夢」と題して、旅の途上の景勝が一八図添えられている。すべて見開き。特徴的な点はまず、最初の五ウ・六才が地図であること。そして、多色刷で印刷されている点である。

坤の巻の挿絵は、拙堂の門弟で画家の宮崎青谷の手に拠る「梅溪図八葉」

で、乾の巻の挿絵は、近江の画家である福田半香が手掛けたもの。彼らは拙堂の旅に実際に同行しており、本書の絵はそのときの取材をもとに描いたものである。

なお、本書は内務省の旧蔵。

【書誌】

外題・「月瀬記勝 乾(坤)」左肩四周双边刷題簽(一九・〇糎×二・四糎)

内題・「月瀬記勝」

表紙・原裝黄檗色卍字繫空押表紙(二五・五糎×一七・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三〇丁(二八図)、②二五丁(二図)

匡郭・左右双边・有界(一七・五糎×二二・八糎)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・①扉「谿山精夢」②扉「谿山統夢」①一丁遊紙あり。

【刊年・刊行者】

本書には刊記を欠くため、正確な刊年および刊行者は不明。ただし、序文・跋文に嘉永四年とあるため、それからまもなく出版されたことが想像される。

また、本書見返しには朱色料紙で内題が出されている。「拙堂先生著／

月瀬記勝／看雲亭蔵版」

ここにある「看雲亭」とは、序文・跋文に登場する「觀雲亭」のことであると思われる。文脈からすると、社友であるようだが、具体的に誰の亭号であるかは不明である。

【九九】月瀬記勝 明治一四年刊 二冊

太政官記録局旧蔵「請求番号一七二・〇二八四」

【北の丸】第47号 当館所蔵の「絵入り本」解題③

本書は前掲の嘉永四年跋刊本の明治刷である。概ね体裁は同一であるが、見返の料紙の色が濃く、薄紅色の前掲書に対して濃い紅色である。また、同様に、挿絵の多色刷に用いられている顔料も色彩が濃い。明治に入り西洋絵の具の影響を受けたものと思われる。

なお本書は太政官記録局の旧蔵。

【書誌】

外題・「月瀬記勝 翻刻 乾(坤)」左肩四周双边刷題簽(一九・〇糎×二・

二糎)

内題・「月瀬記勝」

表紙・改裝香色表紙(二五・三糎×一七・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三〇丁(二八図)、②二五丁(二図)

匡郭・左右双边・有界(一七・五糎×二二・八糎)

印記・「太政官記録印」「日本政府図書」

備考・刊記部分に「定価四十銭」の朱印あり。

【刊年・刊者】

本書は前掲の嘉永四年序跋刊本を、明治一四年に再刷したもの。刊記は以下の通り。

「明治一四年七月廿日翻刻御届／同年八月出版／著者 故人 斎藤拙堂／反判人 大阪府平民 豊住幾之介 東区備後町四丁目四十番地住／発兌人 伊賀上野中町 豊住伊兵衛／同 伊勢津宿屋町 篠田伊十郎」

【一〇〇】月瀬記勝 明治一四年刊 二冊

旧蔵者不明「請求番号一七二・〇二九三」

本書は前掲書同様の明治刷であるが、前掲書と大きく異なる点が二つある。

まず第一に、本書は二・六糎×八・二糎の小本であり、土産物として携帯することを念頭に置いたもの。ただし、版面や体裁は元の版を再現しようとしており、丁数や挿絵の位置、文字数などは同一。

そして、第二に、本書は銅版刷である。したがって印刷は鮮明であるが、やや墨にじみが見られる。挿絵には前掲書のような色刷りはない。

当初はひなびた土地であった月ヶ瀬も、本書が出版されるころには観光地としての全盛期を迎えていた。本書はそんな当時の月ヶ瀬で土産と一緒に販売されていたという。

【書誌】

外題・「月瀬記勝 天(地)」左肩四周双边刷題簽(八・〇糎×一・四糎)

内題・「月瀬記勝」

表紙・改装香色表紙(二・六糎×八・二糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三〇丁(一八図)、②二六丁(二図)

匡郭・四周双边・無界(九・二糎×六・〇糎)

印記・「日本政府図書」

備考・見返しに朱色料紙で内題「斎藤拙堂著／月瀬記勝／平安 尚古堂」

【刊年・刊行者】

②二六才の刊記は以下の通りである。

「明治十四年一月十八日翻刻御届／同年同月刻成／定価三十銭／翻刻人

京都府平民 辻本定次郎 下京区第五組中久町九番地／発兌人 同 辻本

九兵衛 上京区第三〇組天性前町六百八十番地／同 大阪府下平民 辻木

信太郎 東区北久太郎町四丁目八番地」

刊年に「明治十四年一月」とあるが、実際には、明治十三年十二月とあったものの上に紙片を貼り、その上から墨書で修正してある。

また発兌人の辻本九兵衛は、幕末から出版を行っていた京都の書肆で、見返しに「尚古堂」とあるのは、この辻本九兵衛の屋号である。翻刻人とある辻本定次郎は同族であろう。辻木信太郎とあるのは、辻本の誤りか。

【二〇二】霞浦遊藻 明治九年刊 一冊

旧蔵者不明「請求番号二〇六・〇六一三」

本書は明治期に入ってから著された漢詩紀行文であるが、近世までの漢詩紀行文の体裁をそのまま留めている。作者の霞ヶ浦周遊について記録したものの。

作者は三島毅。号を中洲。山陽の人。漢学者として松山藩・岩国藩に伺候。嘉永年間中には、前掲『月瀬記勝』の作者である斎藤拙堂を伊勢に訪ね、漢学を学んだという。明治維新後は大審院判事を務めた。本書は判事を辞してのち著したものであるらしい。

挿絵は四ウ・五才の見開き一個所。霞ヶ浦の風景を描く。序文のあとの本文扉として添えられた。

本書には「秘閣図書之章」が押印されているが、明治九年に初版されたものであるので無論紅葉山文庫旧蔵ではなく、新収の際に押されたものである。本書の他にも新収雑書に押印された例は少なくない。

【書誌】

外題・霞浦遊藻 三島毅著 全「左肩四周单边刷題簽(一六・七糎×二・〇糎)」

〇糎)

内題・「霞浦游藻」

表紙・原裝香色表紙（二三・三種×一四・二種）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三〇丁（二図）

匡郭・四周双辺・有界（一四・三種×一〇・五種）

印記・「秘閣圖書之章」「日本政府圖書」（※刊記下に「定価十八錢」の朱印ある）

備考・見返しは朱色料紙で「明治九年六月／中洲三島先生著／霞浦游藻

全／発兌書肆 別所平七 高橋源助」とある。

【刊年・刊行者】

三〇オの刊記には以下の通りある。

「明治九年六月八日出版御届／東京壹番町四十三番地／著作者 三島毅／

同 下谷仲徒町三丁目三十二番地／出版人 森春濤／発兌書肆／大坂心齋

橋通唐物町 河内屋喜兵衛／備中高梁 柴原宗助／常州土浦 伊沼弥助／

同 寺田新助／東京湯島松住町四番地 島屋平七／同 通新石町十八番地

須原屋源助」

よって出版は明治九年。発兌書肆として全国六書肆の名が載るが、版元は島屋平七と須原屋源助であろう。見返しには版元名として本姓で出ている。

【一〇二】清国紀行桑蓬日乗 明治五年刊 二冊

外務省旧蔵「請求番号二七一・〇三七二」

本書は明治初期に当時の清国を旅した外務官僚の記録。条約締結のために清国に赴いた作者が上海から天津、北京に至るまでの五ヶ月間の旅の記

録である。それまでの紀行文とは異なる特徴を備えているものの、本の体裁としてはそれまでの近世の紀行文と同様である。挿絵も南画風であるが、写真の模写を含むため構図がやや近代的なものがある。近世から近代への過渡期的な出版物として興味深い資料である。

作者は石幡貞。号は謙斎。岩代の人で安井息軒に師事した漢学者。明治四年に外務省に出仕し、同年、清国との条約締結のために派遣された廟議使の随行員として渡航した。本書はこのときの記録で、帰国後に清書されて出版された。なお、このときの全権大使は伊達宗城。このうち石幡は司法省に出向、しかし朝鮮事件をきっかけに外務省に戻った。他にも、外務省勤務の経験を生かした紀行文の著作がある。

本書の本文は漢字片仮名交じり文である。作者自身の凡例によると、もとは漢文で書き著したものを、出版に際して和訳し、より平易な文章に改めたという。また挿絵も、もとは作者自らが描いたものを、出版の際に絵師によって清書させたものだという。

絵師は瀧和亭。本姓は田中。別号は水山、翠山、蘭田。幼少期に佐藤翠崖に学んだのを始めに、荒木寛快、片桐桐陰に師事して南北合派を、さらに大岡雲峰・鉄翁祖門に明清画を学んだ。長崎に遊学し、また清人画家の陳逸舟、華昆田らとも交わった。安政年間に江戸に戻り幕府に仕え、維新の頃は万博に参加するなどして、明治期の代表的な花鳥画家として活躍した。日本美術協会の設立にも参画、明治二六年には帝室技芸員に選出された。

なお、本書は在清国大使館に所蔵されていたもの。「在清国日本総領事館印」「在清国日本公使館所蔵記」の円型朱印が押印されている。これら在外公使館の旧蔵書はのちに外務省に移管されて、そのうち文庫に移された。

【書誌】

外題・清国／紀行／桑蓬日乗 上(下) 左肩四周双辺刷題簽(一五・五
糎×二・八糎)

内題・「清国紀行 桑蓬日乗」

表紙・原裝香色表紙(二二・三糎×一五・三糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三二丁(八図)、②三三丁(八図)

匡郭・四周双辺・無界(一五・〇糎×一〇・五糎)

印記・「在清国日本総領事館印」「在清国日本公使館所蔵記」

備考・見返しは山吹色料紙で「謙齋石幡貞著／清国紀行桑蓬日乗／壬申
春正月官許 有所不為齋蔵」とある。

【刊年・刊行者】

②三二才にある刊記は以下の通り。

「発兌書肆／東京芝神明前 岡田屋嘉七／同小伝馬町三丁目 幸山堂茂
兵衛／同横山町一丁目 出雲寺万次郎」

本書の場合、刊記に年号の記載はないが、見返しに「壬申春正月官許」
とあり、明治五年の刊行であることがわかる。これは、作者が清国を周遊
した明治四年の翌年にあたる。刊記に記載の版元については、岡田屋嘉七・
出雲寺万次郎はいずれも、江戸前期から活動していた老舗の本屋である。

【一〇三】清国紀行桑蓬日乗 明治五年刊 二冊

文部省旧蔵「請求番号二七一・〇三七二」

本書は前掲書の同版本。ただし、やや版木の磨滅がみられるため、本書
のほうが出版時期が遅れると想像される。また、②三二才の刊記が脱落し

ている。

なお、本書は文部省の旧蔵書。のちに、昌平坂学問所跡に設置された公
開図書館・書籍館に移管された。

【書誌】

外題・清国／紀行／桑蓬日乗 上(下) 左肩四周双辺刷題簽(一五・五
糎×二・八糎)

内題・「清国紀行 桑蓬日乗」

表紙・原裝香色表紙(二二・三糎×一五・三糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三二丁(八図)、②三三丁(八図)

匡郭・四周双辺・無界(一五・〇糎×一〇・五糎)

印記・「書籍館印」「文部省印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・見返しは山吹色料紙で「謙齋石幡貞著／清国紀行桑蓬日乗／壬申
春正月官許 有所不為齋蔵」とある。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は欠けているが、見返しは前掲書と同一。したがって本書も
前掲書とほぼ同時期に出版されたものと考えられる。

【一〇四】東遊日録 明治二年刊 一冊

旧蔵者不明「請求番号一七七・〇九六二」

本書は明治に入ってから出版されたものであるが、内容は、幕末に作者
が京都から江戸へと旅をした際の漢詩紀行文である。作品そのものの成立
は弘化三年であるが、本書の作者は加賀藩の尊攘派として幕末に辛酸をな
めたこともあり、出版が明治期へと持ち越されたようである。本書の体裁

は、四周双辺の匡郭や見返しに朱色料紙を用いて内題を出すなど、それまでの近世以前の漢詩紀行文の体裁に則っているが、それまでと大きく異なる点として、金属活字で出版されていることを指摘できる。綴じ方はそれまでの出版物同様袋綴であるが、糸で綴じず、一度ホチキスのようなもので留めた跡がある。現在はそれがはずされていて、表紙とは糊であわせられている状態である。何度か改装されていると思われる。

作者は豊島毅。号を洞斎。幕末から明治にかけて活動した漢学者である。加賀金沢藩士。金沢藩明倫堂に学び、のち江戸の杉原心齋塾に学ぶ。上野安中藩に伺候したあと、明倫堂講師・助教。文久三年、勤王家として上洛して政情を探ったが、藩の方針に添わなかったがために召還、幽閉された。明治元年に許されて、維新後は県の権少属兼文学教師。

本書に序文・評・識語を寄せているのは同輩にあたる金沢藩士の千秋藤範（藤篤とも）。号は有磯など。昌平黌に学び、明倫堂助教、前田慶寧の侍読を務めた。禁門の変に際して慶寧の側近として画策したが、帰藩後捕えられ、切腹を命じられた。

本書は弘化三年に成立しているから、江戸から帰藩して明倫堂助教を務めたころに、豊島毅に宛てて序を寄せたのであろう。おそらく自筆版下が用いられた。本書はこの千秋藤範の死後に出版され、豊島毅自身の序では、その早すぎる死を悼んでいる。

挿絵は五図。旅先の景色を描いたもの。南画風の柔らかい筆致の絵が添えられている。

【書誌】

外題・「豊島／毅著／東遊日録 全」左肩四周双辺刷題簽（一三・三種×二・二種）

内題・「東遊日録」

表紙・改装青鈍色表紙（一九・三種×一三・〇種）
墨付丁数（うち挿絵枚数）・三一丁（五図）

匡郭・四周双辺・無界（一四・八種×一〇・八種）
印記・なし

備考・見返しに朱色料紙で内題「明治十一年新鑄／洞斎豊島先生著／東遊日録／門人 中宮誠之 戸水信義 校」、第四丁が衍丁。

【刊年・刊行者】

本書の刊記には次のようにある。

「明治十一年十二月二十一日版權免許／定価拾三錢／著者并出版人 豊島毅 石川県加賀国第十大区小七区上柿木島十二番屋舗／発兌 吉本次郎兵衛 石川県加賀国第十大区小八区长町川岸新建十一番屋舗」

見返しの内題によれば、校訂は豊島毅の門人である中宮誠之と戸水信義が行ったと思われる。版元と思われる吉本次郎兵衛も加賀の人である点からみて、加賀を中心に出版されたものだと思うられる。

なお、本書の他にも、明治一九年版があるが、これは木版刷りである。

【一〇五】東遊日録 明治一九年刊 一冊

旧蔵者不明「請求番号一七七・〇九六〇」

本書は前掲に同じ『東遊日録』であるが、本書の場合、前掲書よりもあとの明治一九年に木版印刷で出版された。

挿絵は極めて似ているが、覆刻ではなく、模写したものを再刻してある。序文など自筆版下部分も同様。毎半葉一〇行と、前掲書と同じ行数のため分量は概ね同じだが、匡郭の大きさにやや違いが見られる。

本書は、近世以前の漢詩紀行文の体裁を受け継いだもの。前掲書と比較すると、より古典的な作りになっている。

【書誌】

外題・「豊島毅著／東遊日録 完」左肩四周双辺刷題簽（一二・三糎×二・五糎）

内題・「東遊日録」

表紙・原裝香色表紙（一八・三糎×一二・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三三丁（五図）

匡郭・左右双辺・無界（一三・六糎×九・五糎）

印記・「日本政府図書」

備考・見返しに朱色料紙で内題「豊島毅著／東遊日録 完／畏三堂蔵梓」

【刊年・刊行者】

本書三三才の刊記は以下の通り。

「明治十九年四月五日出版御届／定価拾五錢／著者 東京府士族 豊島毅
麹町区宝田町二番地／出版人 東京府平民 須原鐵二 日本橋区西河岸
町拾二番地」

これによれば本書は前掲の金属活字版が出版された明治一年の八年後、明治一九年に出版されたもの。作者の住所が金沢から東京へと変わっている。豊島洞齋は、県の権少属兼文学教師を務めたあと上京し、斯文会に入り学徒の指導にあたった。本書はそのときの出版である。

版元の須原鐵二は、幕末から明治にかけて活動した江戸の版元。江戸の須原屋一統の内の一である。号を畏三堂。見返しに出してある「畏三堂蔵梓」とあるのもこの須原屋のこと。

【二〇六】毛山探勝録 明治一四年 二冊

太政官記録局旧蔵「請求番号一七七・〇九〇三」

本書は明治期に出版された漢詩紀行文で、近世までの漢詩紀行文の体裁を踏まえてその影響を色濃く残すものの一つ。明治一〇年に作者が群馬県へと旅した際の記録である。上下二冊。

作者は漢学者で太政官書記官でもあった野口常共。号は松陽。肥前佐賀藩出身で、維新後太政官正院に出仕。以降一貫して、明治新政府の文書行政に携わった。序文によると本書の出版は明治一一年には計画されていたようだが、この頃から野口常共は病がちであつたらしく、本書が出版された明治一四年にはすでに死去している。

挿絵は扉として群馬の景勝が加えられた。上巻のみ見開き。

上巻の題字は三条実美が寄せたもの。題辞は大隈重信。下巻の題字は伊藤博文によるもので、作者がいかに明治新政府で要職の地位にあつたかが窺われる。また、その他に序や評を寄せている人物も皆、漢詩文の師・森魯直のもとで学んだ同門の漢学者であり、作者の交友関係をしのばせる。

なお、本書は、作者が長年勤務した太政官正院の記録局の旧蔵書。献本か。

【書誌】

外題・「毛山探勝録 野口常共著 上(下)」左肩四周単辺刷題簽（一六・三糎×二・四糎）

内題・「毛山探勝録」

表紙・改裝香色表紙（二二・五糎×一四・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二九丁（二図）、②二四丁（一図）

匡郭・左右双辺・有界（一四・〇糎×一〇・五糎）

印記「太政官記録印」「日本政府図書」

備考・刊記に「定価五十銭」の朱印あり。

【刊年・刊行者】

②二四オの刊記は以下の通りである。

「明治十四年八月十八日御届／東京麹町区中六番町二十一番地／著述人野口常共／同 下谷区仲徒町三丁目二十六番地／出版人 森泰二郎／中六番町中二十一番地 編纂人 野口一太郎」

先に述べたように、本書は明治一〇年に記録され、翌一一年にはすでに出版の計画があった。しかし、明治一四年の作者没後の出版になったという経緯があるとみられる。

出版人として名前の載る森泰二郎は漢詩人であると同時に、司法省に出仕後、修史館に勤務しており、作者の同輩にあたる。伊藤博文のハルビン行きに随行し、伊藤が暗殺された際に自身も被弾した。号は槐南。編纂人の野口太一郎は、作者の息子で漢詩人。号は寧斎。病がちの作者に代わり、周囲の人々の手によってなされた出版であることがわかる。

【二〇七】得閒瑣録 明治二四年 一冊

旧蔵者不明「請求番号二〇六・〇五八五」

本書は漢学者の川田甕江（本名を剛）の手による漢詩紀行文である。本書もそれまでの紀行文と同じ体裁がとられているが、使用されている紙は酸性紙である。一巻一冊。作者の鎌倉紀行に始まり、多く故事が引用されている。

本書の作者である川田甕江は、備中の人で、幕末の江戸で安井息軒らに学び、近江大溝藩に招かれて藩校修身堂の規則を定めた。その後、故郷の

備中松山藩に伺候。明治維新後は、修史局編纂御用係。文学博士。のち貴族院議員、古事類苑編修総裁、宮中顧問官などを歴任、大正天皇の侍講も務めている。修史館時代に、『太平記』をめぐる問題で重野安禪と激しく対立したことで、宮内省に異動となった経緯がある。著書はあまり多くない。

本書の挿絵は、扉として風景画が添えられているのみ。見開き。江の島と富士を臨む。

なお、本書の旧蔵者は定かではない。見返しに朱印で「第一四五號」、同じ書体で裏見返しに「廿四年七月六日納本」とある。本書の出版は明治二四年であるので、新刊として政府に納本されたものと思われる。

【書誌】

外題・「得閒瑣録 単」左肩四周単辺刷題簽（一・三・四糎×二・〇糎）

内題・「得閒瑣録」

表紙・改装香色表紙（二・一・五糎×二・二・七糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二四丁（二二図）

匡郭・四周単辺・無界（二・四・二糎×九・二糎）

印記・「日本政府図書」「第一四五號」「廿四年七月六日納本」

【刊年・刊行者】

二四オの刊記は以下の通りである。

「明治廿四年六月廿日印刷／同 廿四年六月三十日出版／著者 川田剛 牛込区若宮町四十一番地／発行兼印刷者 吉川半七 京橋区南伝馬町一丁目十二番地」

発行者として名前の載る吉川半七は、維新前までは近江屋半七として活動していた書肆である。初代は嘉兵衛でもとは貸本屋。二代半七が文久三年に養子入りして、文政天保ころから本格的に出版に携わるようになった。

維新をきっかけに吉川半七と名乗るようになるが、版元としての活動はそのまま続いた。現在の吉川弘文館。

【二〇八】探奇小録 明治一九年 一冊

旧蔵者不明「請求番号二〇六・〇六〇八」

本書は漢学者である藤沢南岳の手による漢詩紀行文である。十津川から那智熊野を周遊した記録。一卷一冊。活字出版。装丁は袋綴じで、近世以前の漢詩紀行文と同じ体裁をとるが、紙は酸性紙。明治期にみられる特徴をふまえている。

作者の藤沢南岳は、もとは讃岐高松藩士。藩に伺候し、幕末の混乱期には、佐幕派の藩を官軍に帰順させるために活動した。廃藩後は大阪で、父から受け継いだ塾舎の泊園書院を再開して門人育成に尽力した。大阪の「通天閣」の命名者としても知られる。大正九年に七九歳で没するまで、数多くの著作を残している。本書はそのうちのひとつ。

刊記には著者名の前に「愛媛県士族」とあるものの、現住所が大阪になっており、まさに大阪で後進の育成に努めていた時期の出版であることがわかる。

本書の挿絵は扉に描かれた見開き二図のみ。南画風の風景画で川下りの様子を描いたものであるが、どこか景勝であるかについては書き込みがない。おそらく十津川の風景か、あるいは那智の様子であろう。扉の題字と挿絵は、本文と異なり木版刷りである。

なお、本書の旧蔵者は不明である。

【書誌】

外題・「探奇小録 全」左肩四周双辺刷題簽（一〇・二糎×二・五糎）
内題・「探奇小録」

表紙・改装水色表紙（一七・〇糎×一〇・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二三丁（二図）

匡郭・四周双辺・有界（一四・五糎×八・〇糎）

印記・「日本政府図書」

備考・題簽に墨書で「藤沢南岳著」とある。刊記に朱印「定価金十銭」とある。

【刊年・刊行者】

二三才の刊記は以下の通り。

「明治十九年十月二十六日御届／同年十一月十五日刻成／著述兼出版人

愛媛県士族 藤沢南岳 大阪府東区淡路町一丁目十六番地寄留」

先に述べた通り、作者の現住所が大阪になっている点からみて、塾舎・泊園書院を再開したのちの出版であることがわかる。また、版元名がなく、「著述兼出版人」とある点からみて、ごく小規模な自費出版のようなものであったことが想像される。当文庫に収蔵されたのも、作者自身の献本の可能性が高い。

【二〇九】探奇小録 明治二〇年 一冊

旧蔵者不明「請求番号二〇六・〇六〇七」

本書は前掲書と同一の漢詩紀行文であるが、前掲書が出版された翌年に出版された木版刷りの別版である。より近世以前の出版物の体裁に近づいている。

前掲書が每半葉九行であるのに対し、本書は八行。そのためやや丁数が増えている。

挿絵は前掲書同様、扉としての見開き二図。前掲書と同版と見られる。

本文内容は前掲書とほぼ同一であるが、本書の場合、前掲書にあった跋文が欠けている。

なお、本書も旧蔵者は不明である。

【書誌】

外題・「探奇小録 全」左肩四周双辺刷題簽（二・三・五）

内題・「探奇小録」

表紙・改装縹色表紙（一七・五）×（一〇・八）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二四丁（二）

匡郭・四周単辺・有界（二・五）×（七・五）

印記・「日本政府図書」

備考・刊記に朱印「定価十銭」とある。

【刊年・刊行者】

二四才にある刊記は以下の通り。

「明治二十年六月六日御届／同年七月日刻成／著述兼出版人 愛媛県士族 藤沢南岳 大阪府東区淡路町一丁目十六番地寄留」

ただし、本書には墨書で刊記の訂正が入っている。

まず、冒頭に「明治十九年十月廿七日出版之初」とある。また、「明治二十年六月六日御届が「明治二十年六月六日再板御届」に訂正されている。

本書に関しても出版人として作者自身の名前が載せられていることから、小規模な自費出版であったと思われる。この墨書による訂正は作者自身のものか。

【二一〇】晃山紀行 明治一八年刊 二冊

旧蔵者不明「請求番号一七七・〇八八」

本書は作者である小松恒による紀行文で、体裁は近世以前の漢詩紀行文とほぼ同一であるが、刊行は明治一八年で、明治以降の特徴を持つ版本である。上下巻二冊。本文は漢字片仮名交じりだが、引用された和歌などは変体仮名での記載である。書名に関しては、外題・内題ともに別名として『日光みちのしは草』という書名が挙げられている。

序文によれば、明治一七年に、作者が東京小石川の自宅から日光へと旅した際の記録である。本文の記述をみると、近世以前の漢詩文集に共通した内容が多いが、隅田川沿いを馬車で移動したなど、明治の雰囲気を感じた部分も見受けられる。

序を寄せているのは公爵二条基弘、三島中洲ら。跋文には佐々木弘綱ら。作者の交友の広さが窺える。

なお、本書の旧蔵者は不明である。

【書誌】

外題・「晃山紀行 小松恒著 一名日光みちのしは草」

内題・「晃山紀行 一名日光みちのしは草」

表紙・原裝香色表紙（二・二）×（一五・〇）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①三三丁（二）②三〇丁（挿絵なし）

匡郭・四周双辺・無界（一五・五）×（一一・五）

印記・「日本政府図書」

備考・刊記部分に「定価五拾銭」の朱印あり。

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り。

「明治一八年十二月五日出版御届／著者 長野県士族 小松恒 神田区三崎町二丁目拾番地寄留／出版人 石川寿々 東京日本橋馬喰町二丁目一番地／発行所 石川治兵衛 同」

【一一一】遊鬼通路溪記 明治二〇年 一冊

旧蔵者不明「請求番号一七七・一一〇六」

本書は明治二〇年に出版された漢詩紀行文。作者が関西地方を遍歴した際の記録である。

本書の袋綴を四針綴にした体裁は、近世以前の出版物の体裁と同一であるが、金属活字での出版。

作者は野村文夫。広島藩士に生まれ、藩儒であった頼聿庵（頼山陽の子）に学んだ後、適塾に遊学。藩の蒸気船購入に尽力したため長崎を数度訪れており、その際、トーマス・グラバーの知遇を得る。のちにグラバーの斡旋で、彼の故郷スコットランドへ留学している。帰国したのは慶応四年。維新後は明治政府に招かれ、内務省などに勤務したがのち依願退職。ジャーナリストとして風刺雑誌「团团珍聞」を創刊した。明治二二年には日本新聞の発刊に参画し、神田雉子町の自宅を日本新聞社に譲渡している。本書の刊記に記載された住所は神田雉子町であるので、これ以前の出版であることがわかる。

本書の挿絵は扉として添えられたものであるが、見開きで八図連続。南画風の景勝図。薄墨を用いて奥行きを出している。

なお、本書の旧蔵者は不明。

【書誌】

外題・「遊鬼通路溪記」左肩四周双辺刷題簽（一三・〇糶×一・八糶）
内題・「遊鬼通路溪記」

表紙・原装代赭色表紙（二七・八糶×九・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・一九丁（八図）

匡郭・四周双辺・有界（二二・〇糶×七・三糶）

印記・「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書の刊記は一九ウの末尾の行に、朱色の活字で小字双行で入れてある。

「明治廿年九月五日御届／非売品 著者兼出版人 神田雉子町卅二番地 野村文夫」

日付の「五」のみ手書きで書き加えられている。「非売品」とある点からみて、ごく個人的な出版であったと思われる。野村文夫の自宅は『团团珍聞』の発行元「团团社」が置かれていたこともあり、本書の発行は容易だったであろう。

【一二二】踏雲遊記 明治三三年刊 一冊

旧蔵者不明「請求番号一七七・〇九八九」

本書は明治三三年に刊行された漢詩紀行文。体裁は袋綴で近世以前の出版物と同様だが、金属活字での印刷出版である。一卷一冊。料紙は酸性紙。

本書には『踏雲遊記』の他に『三日二山遊記』と、附録として巻末に漢詩集が収録されている。『踏雲遊記』は、友人の陸羯南から富士登山の話聞いた作者が、自身もそれに倣って富士登山に臨んだ際の記録。『三日二山遊記』は、群馬県での登山の記録である。題にある「二山」とは、赤

城山と榛名山のこと。本書はこれらの記載から、漢詩紀行文としての芸術性のみならず、山岳登山の資料としても貴重なものである。

作者は外崎寛。幕末に生まれ、明治に活動した漢学者。陸奥弘前藩の藩儒の子として生まれ、自身も私塾で漢学を教える傍ら、川田甕江、三島中洲に学んだ。維新のち宮内省に招かれ史書編纂に関わり、また陵墓監もつとめた。宮内省時代には森鷗外と親交があり、小説『渋江抽斎』には実名で登場している。これは弘前藩医であった渋江抽斎について、鷗外が外崎に対して取材したことがきっかけとなった。作中にはその印象と、手紙のやりとりが記されているが、実際に二人の往復書簡も残されている。

本書の挿絵は扉絵としての一図のみ。南画風に描かれた富士図である。なお本書の旧蔵者は不明である。

【書誌】

外題・「踏雲遊記」／三日二山遊記／附詩 拙居外崎寛著「左肩四周双辺
刷題簽（一六・〇糎×三・〇糎）

内題・「踏雲遊記」

表紙・原装代赭色表紙（二五・三糎×一五・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二八丁（二図）

匡郭・四周双辺・無界（二七・〇糎×二二・〇糎）

印記・「日本政府図書」

備考・『踏雲遊記』（三オ〜一〇ウ）『三日二山遊記』（二一オ〜二〇ウ）『附録』（二一オ〜二七ウ）

【刊年・刊行者】

二八オの刊記は以下の通り。

「明治三十三年七月十日印刷／同年七月十五日発行／著者并発行者 外崎寛 東京市牛込区東横二十番地／印刷者 平山為之助 青森県北津軽郡

栄村大字湊二十三番地／発売所 吉川半七 東京市京橋区南伝馬町一丁目十二番地」

これによれば本書の刊年は明治三十三年のことである。作者の故郷である旧弘前藩の印刷所によって出版されたようである。東京での販売を担当したのは、維新前から活動している書肆の吉川半七（近江屋半七）。

【二三】柳橋新誌 明治七年刊 一冊

浅草文庫旧蔵「請求番号二〇六・〇六一九」

本書は幕末から明治にかけて出版された全三編の随筆『柳橋新誌』の、第二編に相当する。一編一冊。近世以前の和本と同様の体裁で、整版印刷を袋綴じにしたもの。本文は漢文で返り点や訓点が付されている。

『柳橋新誌』第一編は、安政六年に成立した成島柳北による随筆で、幕末に賑わった花街である柳橋の風俗を活写して人気を得た。本書は明治に入ってから出版された、その続編である。短編小説集のごとく短い逸話を並べた構成となっており、明治維新で激しく変化していく花街の様子を描いている。この背景には、新政府への風刺が潜んでおり、明治九年に完成した第三編は発行を差し止められて散逸した。

作者の成島柳北は幕末の人で、江戸御厨河岸の旗本の家に生まれた。成島家は代々侍講を輩出しており、柳北自身も將軍家斉・家茂の侍講を務めている。しかし文久三年に狂詩で幕閣を批判したこととその役を免じられた。このときの閉居の際に洋学を学ぶなどして見識を深めたといわれている。のちにこの洋学の知識を基礎に騎兵頭並・外国奉行・会計副総裁を歴任したが、維新ののちは野に下って分筆を専らとした。本書が刊行された

明治七年には『朝野新聞』の社主に迎えられ、草創期のジャーナリズムを牽引した。明治一七年に四八歳で死去。本書はその生涯で多くの著作を残した中、傑作といわれているものである。

本書の挿絵は、扉として一ウ・二オに見開きで添えられている。「真景所見」と題された柳橋の風景である。本文中に挿絵はない。

本書は浅草文庫の旧蔵書であるが、それ以前の来歴は不明である。

【書誌】

外題・「成島／柳北／著録／柳橋新誌 二編 全」左肩四周双辺刷題簽
(一五・八糶×二・五糶)

内題・「柳橋新誌」

表紙・原裝黄檗色表紙(二二・〇糶×一五・二糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・三四丁(二二図)

匡郭・左右双辺・有界(一六・八糶×一二・〇糶)

印記・「浅草文庫」

備考・見返しに朱色料紙。裏打ちに反故紙あり。「消印」あり。

【刊年・刊行者】

本書の三四オの刊記は以下の通りである。

「明治七年第二月刻成／発售書肆 京橋銀座三丁目 山城屋政吉」

本書は明治七年に出版された。

版元としてあがっている山城屋政吉は、刊記にあるのと同じ京橋銀座三丁目に店を構えていた老舗の書肆。本姓は稲田氏。号は学而堂、奎章閣など。初代政吉は南伝馬町一丁目に店を出したが、二代目政吉のときに銀座三丁目に移った。のち廃業して京橋つく島西河岸通一一丁目に移った。以来、古書の収集家として活動することになり、殊に江戸絵図のコレクターとして著名だった。

【二一四】和歌威徳物語 元禄二年刊 五冊

内務省旧蔵「請求番号二一一・〇〇五五」

本書は元禄二年に出版された説話集で、特に和歌の功徳にまつわる一〇一の説話を収集したもの。『古今著聞集』などの古来の説話集と共通する内容も多い。成立年代については未詳。下限の説話が『宗祇諸国物語』に共通することから、慶長から貞享頃かと想定される。以降、本書は和歌の奨励として編まれ、習得のために必要な基本知識として受容された。他に『和歌奇妙談』の題を持つ。三巻五冊。作者・絵師ともに未詳。

題目は「神感」「君恩」「人愛」の三つが立てられており、そこにそれぞれの説話が分類されている。「神感」には、和歌の素晴らしさを感じ入った神が恩恵を施した物語、「君恩」には、和歌のおかげで昇進や勅免など君主の恩恵に預かった物語、「人愛」には、人々のあいだで交わされる和歌が力を発揮した物語がそれぞれ分類されている。

挿絵はこれら説話の一場面を描いたもの。説話の舞台にあわせて王朝風の公達や姫君が描かれているが、筆致には元禄時代の特徴がみられる。すべて半葉で見開きの挿絵はない。各冊にそれぞれ約五図程度が配置されている。

每半葉一〇行で行間が広めにとられている本書は、京版の特徴を持つ。江戸版に比べて紙の質もよく、本書の場合、刷りの状態もよい。

本書には旧蔵者のものと思われる「観月楼蔵書」の印記がある。観月楼の蔵書印を用いた人物としては伊勢津藩第一代藩主・藤堂高猷が著名である。本書と同じ「観月楼蔵書」の印記を持つ本には、国立国会図書館

所蔵の『軽口機嫌袋』『読大日本史私記』などがある。本書はのち、明治一二年に内務省によって購入されたもの。

【書誌】

外題・「和歌威徳物語 一（〜五）」中央無地料紙刷題簽（一六・〇糎×三・〇糎）

○糎）

内題・「和歌威徳物語」

表紙・改装浅緑色表紙（二二・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一六丁（五図）、②一七丁（四図）、③

一九丁（五図）、④二〇丁（五図）、⑤二二丁（五図）

匡郭・四周单边（二八・五糎×一四・五糎）

印記・「観月楼蔵書」「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」「日本政府

図書」

【刊年・刊行者】

本書⑤二二ウの本文末尾に載る刊記は以下の通り。

「元禄二年乙巳潤正月下旬／洛陽堺町通／書林 服部九兵衛開板」

本書は元禄二年の初版。他には刊年不明版もあるが、それほど版を重ねなかつたとみられる。版元の服部九兵衛は、元禄年間を中心に活動した京の書肆。本書の他に『西行四季物語』（元禄四年版）を出版しているが、詳細は不明。刊記によれば堺町通に店を構えていたようである。

【二二五】 鳴羽搔 元禄四年刊 三冊

浅草文庫旧蔵「請求番号二〇一・〇〇九四」

本書は近世期に流行した「名数本」の一つであり、名数和歌集と呼ばれ

るもののひとつである。大陸の名数思想に和歌や絵を併せ、類題和歌集の特殊な形として成立した。平易な和歌の参考書として主に女性向けに出版された。歌論・注釈などはない。全三冊。本書は元禄四年版。本書の版の他に天明元年版・刊年不明版が確認されている。作者未詳。

上巻目録を例にとると、「三昧和歌」「三夕和歌」「四季和歌」「四隅和歌」「五行和歌」「五色和歌」といった具合に、名数に関わる和歌を数の小さい順に配列して掲載しているのがわかる。

本書の挿絵は主に和歌に詠まれた風景を描いたもの。第一冊目の冒頭の三図は、三夕の歌に、その景色と歌人の姿を描きこんだもので、やや珍しい趣向。それに続く一二図は六歌仙と新六歌仙の肖像だが、これらの構図や表現は従来の歌仙絵の伝統を踏襲したもの。これらの挿絵は画題のサンブル集としても用いられ、後世に大きな影響を及ぼした。尾形乾山の「色絵十二月歌絵皿」（MOA美術館所蔵）は、本書の挿絵を参考にしたものである。定家の手による「詠十二月花鳥倭歌」は、花二一首・鳥二一首（計二四首）の和歌を花鳥組み合わせた形で記載され、各月の風物が挿絵として添えられた。そのためこれらは恰好の画題となつて多くの絵師に素材を提供したのである。そもそも定家詠は大和絵と共に鑑賞されたものであつたようだが、近世にこれが伝わった際には絵は失われていた。本書において近世の絵師が再び絵を添えたことで、本来の姿を取り戻した。以降、狩野、土佐、住吉、円山、琳派などの流派を問わず、多くの絵師の手によつて受け継がれ、展開した。

しかし、本書そのものの絵師は未詳である。

なお、本書は浅草文庫の旧蔵書であるが、それ以前の来歴は不明。

【書誌】

外題・「絵入／鳴の羽搔 上（〜下）」左肩四周双边刷題簽（一五・五糎×三・

五種)

内題・「鳴羽搔」

表紙・改装香色表紙(二二・〇糎×一六・三糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三四丁(二五図)、②三七丁(三二図)、

③三二丁(三四図)

匡郭・四周单边(二六・五糎×二二・〇糎)

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書の③三二ウ記載の刊記は以下の通り。

「元禄四年辛未正月吉辰／書肆 吉田三郎兵衛 伊藤平八」

前述した通り、本書は元禄四年の初版で、天明元年にも再版されている。

吉田三郎兵衛は京の書肆。もとは榎木町通堺町西入に店を構えていたが、元禄の末年頃には押小路富小路西入に移っている。元禄から延享ころを中心に活動した。伊藤平八も同じ京の書肆と思われるが、本書の他に名前の載る出版物は見当たらず、詳細不明。

【二二六】門田のさなへ 文化二年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇二・〇一一四」

本書は文化二年に出版された子供向けの和歌注釈書である。一巻一冊。本文は毎半葉一二行であるが匡郭がないため行間は広く、子供でも読みやすいよう工夫されたようである。

万葉集や勅撰集から秀歌を選び、その大意や作者についておおまかな解説を載せる。冒頭は親子の情愛に關した和歌が多く選ばれており、親孝行

の在り方について説くなど道徳書としての側面も持っている。解説には近世の文化・俳諧などに則した説明などもされており、全体を通して作者の子供に対する熱意・創意工夫が見てとれる内容である。また当時の一般的な和歌解釈について垣間見ることのできる資料であるともいえる。

挿絵はすべて見開き。所収の和歌の内容・風景を表現したものがほとんど。王朝時代の風俗が多く描かれているが、文人画風の筆致である。

作者は伴資芳(出家して蒿蹊。澄月・慈延・小沢蘆庵らと共に近世の「和歌四天王」に数えられる歌人であった。近江八幡の商家に生まれ、家業を継いだ若くして剃髪、以降文筆に専念。京に住んだ。主な著作に『閑田詠草』『閑田耕筆』『閑田次筆』『国文世々の跡』『訳文童諭』『あし曳の日記』などがある。代表作『近世喩人伝』は有名無名の人物を様々に取り上げた伝記集であり、近世後半の生活を知る貴重な資料である。本書が出版された翌年に死去。

本書末尾には「閑田大人著述書目」として、伴資芳の著作が一二作挙げられている。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵である。印記は確認できないが、表紙右肩に「番外書冊」の貼紙がみられる。これは昌平坂学問所の蔵書のうち「四庫及ヒ国朝古書」以外に分類されたものの呼称である。これらはさらに二七種に分類されて整理された。本書は表紙左下にその分類項目として「和歌雜詠」の貼紙がされたようだが、現在はこの上に蔵書表が貼られていて文字の一部が確認できない状態である。

【書誌】

外題・「門田のさなへ 全」中央四周单边刷題簽(一七・〇糎×四・〇糎)

内題・「門田のさなへ」

表紙・原装山吹色秋草刷文様表紙(二六・〇糎×一八・五糎)

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三七丁（二八図）

匡郭・四周単辺（二〇・〇糎×一五・八糎）※挿絵のみ

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「番外書冊」（貼紙）

備考・二三ウ右下に火損。

【刊年・刊行者】

本書三七才記載の刊記は以下の通り。

「文化二年乙丑春正月発行／皇都書林 北村庄助 著屋宗八 西村吉兵衛 文台屋太兵衛」

本書の出版年は文化二年であるが、作者自身の手による序文は文化元年の日付になっているため、前年には成稿していたようである。

本書は京の四書肆による相合版。北村庄助は五条通高倉東入北側に店を構えていた。号は瑶芳堂。著屋宗八は寛文頃から明治まで長期間活動した書肆で、本姓を神崎氏。号は向松堂。文化年間は寺町通三条下ル西側に店を構えていた。西村吉兵衛は寛永頃から活動していた衣棚姉小路上ル東側の老舗の書肆。号は聖宝堂。文台屋太兵衛は寛延頃から活動していた書肆。多兵衛とも。号は二西堂。明和年間には三条通室町西入に店を構えていたが、のちに三条新町東入南側へと移ったようである。伴資芳の『閑田詠草』（文政五年）の版元である。

【二一七】増補名所方角抄 寛文一二年刊 三冊

昌平坂学問所地誌調所「請求番号二〇二・〇一二五」

本書は寛文六年に初版された『名所方角抄』を増補再版したものである。

『名所方角抄』は、古来から和歌・連歌に詠まれてきた名所を国別に分類

して紹介・解説したもの。山城から東海道を経て奥州をまわり、大和から畿内四カ国、山陽道を九州へ、その後、山陰道を北上して佐渡に至るという形で、六七カ国の歌枕が和歌と共に解説される。三卷三冊。

挿絵はこれら歌枕の風景を描いたもの。八橋など伊勢物語の構図に着想を得たと思われるものも多いが、俯瞰でその国の歌枕を何箇所も描き込んでいる場合が多い。このとき画面には読者を意識してか、旅人の姿も共に描かれる。

作者は宗祇とされ、本書刊記部分には次のようにある。

「此名所方角抄者宗祇法師／廻国修行之書也今亦／加国増補正誤候開板者也」

これによれば宗祇が諸国遍歴の修行の折に書いたものだというが、しかしこれを補強する証拠はない。親交のあった三条西実隆による『実隆公記』には宗祇が歌枕に関心が高かったという記述がみえるが、実際のところは仮託されたものと考えるのが穏当であろう。

宗祇は応仁の乱以降に高まる古典復興の気運の中、隆盛を迎えた連歌を大成させた人物である。出生は定かではないが、庶民の出であることは違ひなく、その身分でついに北野連歌会所奉行、將軍家師範を務めたことは、中世の下剋上の典型であり、近世期に権威化・神格化される要因ともなった。本書のような作品が宗祇作とされたのも、近世期の宗祇に対する絶対視に基づくものであるといえる。

本書は寛文六年版の増補再版。他に寛文七年版、延宝六年版、宝永四年版などの諸版が存在する。なお、本書の他に当文庫には写本も所蔵されている（請求番号二〇二・〇一二六）。この写本は本書と同じ寛文一二年版を写したものであるが、挿絵はない。

本書は昌平坂学問所地誌調所の旧蔵書。地誌編纂の資料として歌枕をま

とめた本書が収集されたとみられる。「文久癸亥」の朱印があることから、文久三年の新収であろう。

【書誌】

外題・増補名所方角抄 上(中・下)「左肩四周双辺刷題簽に墨書(一三・五糧×二・八糧)

内題・「増補名所方角抄」

表紙・改装香色表紙(一九・〇糧×一三・五糧)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①一九丁(七図)、②三九丁(一一図)、③三七丁(一一図)

匡郭・四周单边(一五・七糧×一一・七糧)

印記・「編修地誌備用典籍」「昌平坂」「文久癸亥」「総記」「秘閣圖書之章」

「日本政府図書」

備考・各冊見返しに薄墨で「増補／名所方角抄／宗祇法師作」と出している。臥龍の枠。①の見返しに蔵書表「日本政府図書」貼付。

【刊年・刊行者】

本書の③三七才末尾の刊記は以下の通り。

「寛文十二千子歳／孟春日／書林」

先に述べたように本書は、初版にあたる寛文六年版の増補再版である。

以降、再版された延宝六年版、宝永四年版は、いずれも本書の再版。

「書林」以降の書肆名が削られているのは本書が再版であるため。寛文六年版の書肆は京の谷岡七左衛門。

【二一八】和歌物語 元禄頃刊 六冊

内藤家旧蔵「請求番号二〇二・〇一三四」

本書は一般的には『順礼物語』の書名で知られている仮名草子である。別名に『名所和歌物語』。京都・奈良・高野・西国・坂東・奥州などの歌枕を中心に、作者の諸国遍歴を描いた読み物で、故事や説話を多く含む。三巻六冊。

物語の構成としてはやや煩雑。成立年代は定かではないが、慶長十九年には本書の原形が出来上がり、寛永頃にはすでに出版されていたと思われる。本書は寛永整版の絵入改題本にあたる。本文の版はそのままに、新たに序文と挿絵を加えて、三冊を六冊に改めた。

作者は三浦浄心。出家する以前は三浦五郎左衛門尉茂正と名乗る後北条氏の家臣であった。三五庵木算とも号し、寛永年間を中心に活動した仮名草子作者である。かつては諸合戦で武功を立てた人物であったが、北条氏滅亡のちに江戸に出て商人となったという。晩年は天海僧正に帰依して隠棲していたとされている。仮に本書の内容がそのまま事実であるとすれば、諸国遍歴の経験があるということになる。しかし、その詳細な来歴は定かではない。『見聞集』三三冊と『そぞろ物語』二〇冊の著作があり、後世になってこれらから抄出再編したものが『北条五代記』『見聞軍抄』『そぞろ物語』『猩々舞』『鳥獸憐集』『慶長見聞集』などの著作であり、本書もこうして抄出されて編集されたもののひとつと考えられている。

本書は刊記を持たない刊年不明版。本書の他、刊年が明らかなものには、慶長十九年版、寛永一八年版、元禄一六年版などがある。元来は三巻三冊であるが、本書は六冊。そのため、三冊目と四冊目、五冊目と六冊目の本文が不自然に途切れている。本文では本書は上中下三巻に分けられているが、題簽では①「上之上」、②「上之下」、③「中之上」、④「中之下」、⑤「下之上」、⑥「下之下」と付されている。丁数は各冊ではなく、各巻で通し。

また、本書の場合、匡郭を持たず、写本の体裁に似せている点などは古い版本の形態を残す。(寛永年間の版である。)だが、挿絵に関しては後補である。そのため挿絵の丁付はすべて又丁。

挿絵は一冊につき四図程度。舞台となっている歌枕の景勝などを描いたものと、歌枕に関わる故事・説話について描いたものがある。特徴的なものとしては、元禄頃の様子を描いたと思われる東大寺の大仏や、「食べてすぐ寝ると牛になる」という諺の典拠となった説話に基づく牛の挿絵などである。

なお本書には、奥州磐城平藩内藤家の蔵書印「贖庫」の押印がある。のちに地誌編纂のために昌平坂学問所地誌調所の所収するところとなった。地誌調所の収蔵であるところを示す「編修地志備用典籍」の朱印の他、第三冊目の表紙に分類の目印である「総記」の貼付がある。第三冊目のみが他のものと表紙が異なっている点からみて、この香色表紙が昌平坂学問所地誌調所に新収された際の表紙であると考えられる。他の紺色表紙は改装の際に付けられたものだろう。

【書誌】

外題・「名所和歌物語 上之上(下之下)」左肩四周単辺刷題簽に墨書(一八・八糎×三・五糎)

内題・「和歌物語」

表紙・改装紺色卍字繫艷出表紙(二六・五糎×一九・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二六丁(四図)、②三〇丁(四図)、③

二六丁(四図)、④三四丁(六図)、⑤二五丁(四図)、⑥二七丁(二図)

匡郭・なし

印記・「贖庫」「編修地誌備用典籍」「秘閣図書之章」「内閣文庫」「日本政府図書」(①見返しに蔵書表貼付)

備考・③表紙のみ改装香色表紙、「総記」の貼付。

【刊年・刊行者】

本書には刊記がないため、刊年・刊行者ともに不明。元禄一六年の刊記をもつものに先行する求版か。元禄一六年版と同版であるため、この年代からはそれほど遠く離れないと考えられる。

(研究員)